霧氷が道の両脇からしだれかかり
トンネルをつくっている
凍てついた雪道を
車を走らせ、あなたのもとに向かった

家の中は寒風に吹き荒らされ
楽譜が床に散っていた
あなたの使っていたドイツ語辞書、物理の本も
家は冷たく、すべてが凍っていた

ところが、私たちが抱えたあなたへの想いは
場所を変えて芽生え、育っていった
あなたとのつながりは
雪の下に眠らなかった

チェルノブイリの埋葬の村に
かたくなに移住を拒んで住み続けた
ナボーキンじいさんを訪ねた日
清烈な氷が花々のように咲き乱れていた

新年にあたって

あきらめない

鎌田 實

グランドゼロ
55号 冬

CONTENTS

新年にあたって
「あきらめない」ＪＣＦ理事長・鎌田 實 5

特集 11月三つの訪問団報告 9
新生児支援
医療機器プロジェクト
ポレーシェ学校健康診断
モスクワ便り 31

那珂町通信 38
連載随筆「コ・プレゼンス」＜宮尾彰＞ 40
ジーマのロシア小話 42
ベラルーシの食卓 44

チェルノブイリに寄せる思い 45
この子はだあれ？ Кто этот мальчик？ 49
振替用紙のメッセージから 50

ありがとうございました 56
チェルノブイリ 10ドリームズ8 59
出会い Встреча 60
粗忽堂本舗＜村石保＞ 64
ニュースクリップ 66
Здравствуйте！（事務局広場） 68
本の紹介 Book review 72
「アレクセイと泉」上映予定 74
事務局日誌 75

表紙写真 本橋成一

がんばらないけど あきらめないで

鎌田　實（ＪＣＦ理事長・諏訪中央病院管理者）

２００３年１月１日、いつものように病院の当直で始まります。お正月だというのに、外来は野戦病院のようです。インフルエンザが流行って、２３０人の患者さんが押し寄せました。合間をぬって病院中を声をかけて歩きます。退院、外泊できなかった重い患者さん、家族の事情で迎えに来てくれなかった老人、正月から働いてくれている職員に声をかけます。１月１日の夜は、これも恒例のアルコール依存症の自助グループに顔を出しました。ぼくの家族はもうあきらめています。ぼくは「あきらめない」のですが、１年の計が、こんな風に、まともでないスタートで始まりました。家族みんなで「おめでとう」は夜もずいぶんふけていました。家族にはいつも、申し訳ないと思っています。

１月24日には２年がかりで連載をした、『あきらめない』（集英社）が出版になりました。『がんばらない』より、５倍はインタレスティングにしあがったと著者は勝手に思っています。

『あきらめない』を書いているうちに見えてきたことは、彼らがなんと多くのことをあきらめてきたかということでした。あきらめて、あきらめて、あきらめつづけて生きていました。

よりつらい状況にいる人たちのために、今度は「あきらめない」人のことを書きたいと思ったのに。逆境に負けず、リストラにされても、がんの告知を受けても、シングルマザーになっても、必死にていねいに自分らしく生きている彼らの姿を見た時、私たちが人生の岐路で、どうしても、ゆずれないものが見つかったときには、必死に守り抜いていく「あきらめない」気持ちが大切なのではないかと思ったのです。

僕は若い頃、国際医療ボランティアとして数年働き、いずれは医者がいなくて困っている山の診療所で、働きたいという夢を持っていました。しかし、

『あきらめない』にも書きましたが、自分の隠された生い立ちや、家族のあり方がだんだんわかっていく中で、育ててくれた父と一緒に家族のような空間を作らなければいけないという思いが強くなり、信州の諏訪に定着することにしたんです。父親のことを理解し、好きになるのに50年かかったと書きましたが、その過程で家族のようなものができあがっていきました。一人の男を好きになるのに50年もかかったのです。

父はけっして学問があるわけでも、新しい世界を見せてくれたわけでもなく、また僕をほめてくれたこともなかった。ぼくは回り道をした。50年もかかって、父のすごさがわかった。岩次郎小屋という親父の名前をつけた丸太小屋を建てた。そこで3世代の家族をスタートさせた。僕にとっては自分の人生を変える大きなきっかけになりました。病院を作りながら、自分の家族をどう作っていったらいいのかということに向き合ったわけです。血がつながっていないからこそ努力し、それぞれの人間が自立しながら、それぞれの人間の自由を認め合うことを学びました。かつて日本の家族の絆は強かったはずですが、いまはそれが弱まり、家族の中ですら、暴力や虐待があると聞きます。家族のあり方をもっと問うていかなければいけないのではないかと思ったんです。

『あきらめない』の本の主人公の一人、牛の言葉がわかる、知的障害の患者さんの胃に巨大腫瘍ができた。どうしてあげたらいいのか、彼を支えている周囲が揺れ、医師もまた揺れています。その揺れがいい。命を大切にするということは迷うことだと思うんです。答はそんなにはっきり出せません。大事に思うということは、どっちがいいのか思い悩んでいることなのです。思いやりの前にオモイヤルということが大切なんだと思いました。

この本の最初の１行目は、「人間の体は不思議だ」で始めました。本の最後の言葉は「人間ってすごい」です。『がんばらない』では、実は、ひとりひとりがとてもがんばっていた。がんばってがんばって亡くなっていった。今度『あきらめない』を書こうと思ったのは、科学や医学の常識を越えて生きている人を見てきて、どこからその不思議な力が出てくるのかという畏敬の念でした。『がんばらない』の底流に流れているのは希望でしたが、いま苦難にいる人の、希望を越えて、命を支える力って何だろうと思ったのです。そこで見えてきたのは、ささやかな日々の営み

特集

64 次訪問団：医療機器支援
65 次訪問団：ポレーシェ学校健康診断
66 次訪問団：新生児支援

新生児支援の今年度事業達成！

を、ていねいにやっているということでした。つらい状況を乗り切る不思議な力は、希望や夢を越えて、ささやかなことをていねいにやっていく中で湧き出るのではないか、そのことに僕は気がついて『あきらめない』を書き出したんです。

リストラにあってつらい毎日を送っている人、がんの告知を受け途方に暮れている人、いじめにあって学校に行けない子、苦難の中で生きている人たちに夢や希望を持てというのは簡単ですが、なんとも間抜けな感じがしていました。

昨年の5月にベラルーシ共和国に行った時に、ぼくは気がついたのです。夢や希望を越えて、命に生きる力を与えるものはなにかと。ささやかな日常をていねいに生きる。あ、これなんだと思いました。地図から消えてしまった埋葬の村から教えられました。JCFを作って14年目を迎えました。みなさんとともに、みなさんの協力で、困難な人生を歩んでいるチェルノブイリの子どもたちを、もう少し、支えていきたいと思っています。

がんばれマリアちゃんカンパ、10ドリームズ、事務局支援、環境の勉強会、『アレクセイと泉』の上映会など、いろいろと本年もご協力お願いいたします。非力な事務局ですが、チームワークよく、「がんばらない」けど「あきらめない」で行こうと思っています。ぼくは、言葉を忠実に守って、がんばらないのですが、スタッフは、実に、よくがんばってくれています。がんばる事務局の応援、本年もよろしくお願いいたします。

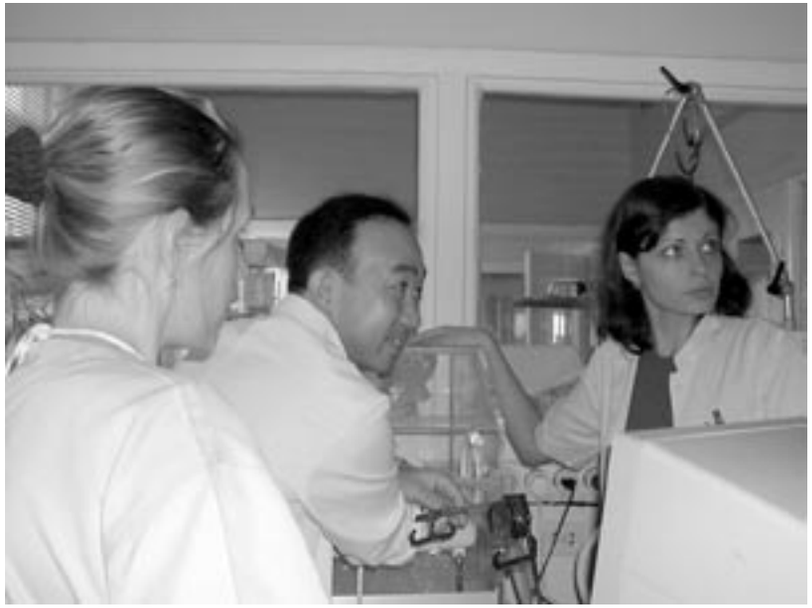
著者・鎌田實
発行・集英社
定価・1500 円＋税

あきらめないって言うことは、あきらめることなんだ。やっと、そのことに気がついた。ぼくたちの人生はあきらめの連続で成り立っている。『あきらめない』の主人公たちも、たくさんのことをあきらめてきた。あきらめて、あきらめて生きながら、時に、あきらめきれないものが、人生には待っている。大切なのはその時なのだと思う。その時に投げ出さず、放り出さず、丁寧に生きる姿を、『あきらめない』の主人公たちが見せてくれた。

「あとがきにかえて」より

病気をつくらない、重症化することを防ぐため技術と知識を伝えたい！

松澤 重行（信州大学医学部小児科）



ベラルーシ共和国では年々人口が減少し、出生率も低下しています。以前この場をお借りして、新生児を取り巻く医療環境が未整備で、病気を持ったあかちゃんの救命率は日本に比べるとはるかに低いことを報告しました。幸いにも昨年５月のＪＣＦ理事会においてこの新生児医療にも手をさしのべていこう、ということになり支援がスタートしました。私たちの支援の当面の目標を、ゴメリ州立病院付属産科病院への支援を中心とし、体重 1000 ～ 1500 g で出生したあかちゃんの救命率を改善すること、そして後遺症を残さず助けることとしました。第 66 次訪問団の報告を兼ねて、現状、問題点などをまとめました。

今回は多くの方々からのご支援をもとに、メディカルエンジニア（ＭＥ）の方々に奔走していただき、超音波診断装置、酸素（SpO_2）モニター、点滴用ポンプを贈ることができました。ありがとうございました。超音波診断装置はあかちゃんの頭の中の異常が疑われた場合に負担をかけず簡便に検査ができるので、治療方針を決める上で役立つはずです。また酸素（SpO_2）モニターは呼吸障害のある患者さんの状態を把握するために必要で日本では多くの救急車にも装備されていますが、この病棟では非常に不足し、治療に支障をきたしていました。州立病院の先生たちはこれらの機器をさっそく使用し始めていました。このほかにも、前回（昨年３月）訪問時に比べて、機器や薬剤が少し増えてきており、これらが病気を持った新生児の治療の向上につながれば、と思います。

病気を持った新生児を助けることにはしばしば困難が伴います。後遺症を残さずに助けることはさらに大変ですが、どうしても大切なことです。これは、ベラルーシの人たちにとっては、人道的な理由ばかりでなく、経済的に苦しく福祉や医療にお金をかけられないお国事情からも切実な問題です。実際に、未熟児を救命しても後遺症を残す場合が多いことが懸念されはじめており、その点を含めた医療協力を要請されました。神経発達上の問題を持つ人たちの頻度、その原因、などを今後調査し、その原因を改善する方法を現場の医療者とともに考えていきたいと思います。また、このような機器を使用してどのように診断し治療していくか、という技術的な援助を進めて行きたいと考えます。

この国の新生児へのチェルノブイリ事故の影響について質問されることがしばしばあります。社会的には、ベ

ラルーシの経済不況は深刻で、医療のなかで後回しにされることの多い新生児医療にしわ寄せが来ていることは明らかです。医療機器、薬品の慢性的な不足は、二次的な診療技術の低下をおこしています。また、ゴメリは放射能の影響が強かったため、農業は打撃を受け、住む人の生活は圧迫されていると聞きます。妊婦検診を受けず、分娩も自宅ですませ、そのあと母児ともに状態が悪く救急車で病院に来るということも絶えないようです（ベラルーシ国内の他州にくらべてゴメリ州の新生児死亡率は明らかに悪いです）。では、医学的な影響はどうか、と聞かれると、チェルノブイリに匹敵する大事故は前例がなく、15年以上前に発生した事故による放射能汚染が世代を超えて胎児新生児にどのような影響をもたらすのか、判断材料がありません。現地でも情報が混乱し、医療者に質問しても答えはさまざまでした。医療現場からの意見として、産科部長が（私的な印象と前置きした上で）「胎盤機能低下、胎盤の形態異常はチェルノブイリ事故後に増加しているのではないか」と話していたのが私には印象的でした（実際この病院の産科の異常分娩としては胎盤機能低下による早期産出生の頻度が高いとのことです）。また、世界の核実験施設地域のなかには、胎児の手足の形態異常が明らかに増えているところがあります。現在ベラルーシには、適齢期を迎えながら放射能汚染への不安のために出産をためらう女性が少なからずいます。これらのことをふまえ、学問的な事実究明にも（医療協力のひとつとして）取り組みたいと考えています。

今回、分娩を見学することができました。分娩室には胎児の心拍数をモニターする機械はなく、昔ながらの木製の聴診器をときどきお母さんのお腹にあて胎児の心拍の状態を把握しながら

超音波診断装置を使った診断方法を説明する松澤医師

お産がすすんでいきました。もう少しであかちゃんが出てくる、というところでなかなか出ず、かなり時間がかかりました。生まれた直後はあかちゃんは泣かず、血の気がすっかり引いた色をしていました。首にへその緒が二回りしていたため産科医があわててそれを外しました。15秒くらいしたころ、ぴくっとし、それから少しずつあえぎ始めました。分娩室内に動揺する空気はありませんでした。15分後には元気良く泣き声が響くようになり、皮膚が赤く良い色になりました。日本でも以前は同じような分娩が行われていたと思います。モニターを使わないお産は自然な印象を受け、必ずしも設備の整った先進国の分娩が良いわけではないと感じるいっぽうで、あかちゃんの側から考えると、このあかちゃんの今後に大きく不安を残すお産でした。分娩時の仮死状態が神経発達の後遺症の大きな原因の一つであることを考えると、後遺症を残さない医療を目指すならば、胎児モニタリングは（適応を考えた上で）必要なのだと感じました。安心してお産することができる環境をつくることにも目を向けるべきと思います。

ベラルーシの医療に触れることは、日本の自分たちの医療を客観的に考える機会になります。日本は重症でない患者さんへの医療や健康な人に対する予防医療にも力を入れており、病気の発症や重症化を予防するシステムになっていることを、これまではあまり意識したことがありませんでした（あくまで二国を比較しての話です）。ベラルーシ国は、新生児医療に対して、重症のこどもに対する集中医療に少し力を入れ始めました。それはとてもよいことです。けれど後遺症を残す問題の芽は、予定より早く小さく生まれてしまうことだけでなく、分娩時の仮死状態や出生後の感染症、低体温など、どこにでも潜んでいます。病気をつくらない、重症化することを防ぐ、といったことのためには、大病院以外の産科新生児施設に、基本的な技術や知識を伝えたり、最低限の機器をそろえていくことが有効と思います。

とりとめがない話になってしまいました。この文章を読んで下さったみなさんのご意見もお聞かせ下さい。今後ともよろしくお願いいたします。

白布でグルグル巻きの赤ちゃんたち

医療機器プロジェクト

現地でのハプニング チームワークで乗り越える

2002年11月2日から10日まで、今年度の医療機器設置とメンテナンスのためにメディカルエンジニアと看護師、総勢7名がモロヂチノ総合病院、国立小児血液がんセンター、ゴメリ州立病院、ゴメリ腫瘍病院に向かった。

10月初旬に現地に着いていた支援荷物が、人道支援局の書面がオリジナルでなければ通関できないと、現地入りした日に病院の技術担当者から言われ、七転八倒の1週間が始まった。

モロヂチノ総合病院、小児血液がんセンターでは、短い時間で目的をほぼ達成する事ができた。病院長の、必要な部署に必要な機器を配置する姿勢や、技術担当者の新しい機器への興味と仕事のフットワークの良さが、日本からの訪問団の仕事が円滑に進むグラウンドを作ってくれた。

渡航メンバーは、出発前から事前準備を重ね、今回留守番役になった岡本さんは、真夜中の現地からの問い合わせ電話にも答えてくれた。チームワークは抜群だ。

3年間、勢いで進めてきた医療機器支援も、現地関係者との丁寧な関係を紡ぎながら進めていかなければならない。ゴメリ州立病院では、腫瘍病院にチェルノブイリ母子支援募金が送った医療機器を「ここに届いたものは、自分達の物だ」と言い張られ、休暇中の保健局長にもお出ましを願う事態となった。ベラルーシの経済事情が悪く、物がないためのあさましさだろうか、支援を受け慣れている傲慢さだろうか、日本との協力の下によりよい医療を目指すならば、まず人間的な信頼関係の構築が第一歩だと強く感じた。

ベラルーシの現状を理解して より良い支援をするには

宮澤 英典（諏訪中央病院看護師）

初めてのベラルーシ

私がはじめて目にしたベラルーシの街並みは、灰色の厚い雲の隙間から、所々に差し込む光が、粉雪に薄化粧された石畳に反射して初冬の朝に耐える木々を浮き立たせていた。

まるで絵本を開いたかのような、本当に「美しい国」としか言いようがなかった。悲惨な事故の爪痕が今もなお沢山の人々を苦しめていることなど、どこから想像ができようか。

今回、JCF第64次訪問団の一員として初めて参加しこの地を訪れた。私はメンバーである臨床工学技士の皆さんに同行し、日本より送られた医療機器の組み立て、保守点検を行い、看護師としての立場からの使用説明、臨床での注意点、有効利用方法等を通訳のイリーナさん、ジーマさんを通しモロヂチノ総合病院、ゴメリ州立病院の医療スタッフに伝える役割を担った。

モロヂチノ総合病院にて

＊相次ぐトラブルでドッと疲れが…

日本からまる二日を費やし、ミンスクの町に到着しモロヂチノ総合病院の門を叩いたのはその日の午後になってからだった。日本から船便で運び込まれた器材の確認に地下の倉庫へ行き、仕事を始めようと腕まくりをすると、既に到着しているはずの荷物が見当た

メンテナンス作業中の宮澤さん

らない。聞くところによると、まだ税関を通っていない荷物があり、その中にトランス（変圧器）があるのだという。日本の機器は電圧の違うこの国ではトランスがないと使用できない。作動するかのテストもできずに器材の確認をしただけで初日は幕を閉じた。しかも、幾つかの部品の所在が不明になっており、一つの部品がないために使用できないものすらあった。

翌日、未到着であった荷物が、税関を通過したとの情報が入りメンバー総出で倉庫まで荷物を取りに行くが、とにかく何か一つ仕事に取り掛かると壁にぶち当たり、ドッと疲れが出る。神谷事務局長さんをはじめメンバーの皆さんは「毎回こうなんだ。この中でできることをやっていくしかないね」と、トラブルにも冷静かつ穏やかに対応していた。皆が一回りも二回りも大きく感じられた。

倉庫のゲートの金網の前で待つこと30分、ゲートが開きさらに待たされること20分、倉庫の扉が開き皆一斉に車を降りると、神谷さん以外は車に待機するようにいわれ、待つこと15分。決してスムーズとはいえない時間を費やし、我々が求めていた荷物を手にすることができた。作業に取掛るころには外は夕闇が迫り、寒くなり始めていた。小児血液がんセンターにて＊エキシン装置を組み立てる廣浦さんチームと分かれ、我々はモロヂチノ総合病院の倉庫の中で医療器材一つ一つにトランスを接続し、電源が入り使用できるか否かのチェックをおこなった。本当ならばこの時点で器材の設置と、幾つかの使用方法の説明が終っていなければならないのに…。一人であせっていると臨床工学技士の小池さんが後ろから肩を叩き「無理をしないで、できる範囲の事をしよう。今日はこれで十分さ」と、励ましてくれた。

この日初めてＪＣＦの皆さんが、今

エキシンのセットアップをする廣浦さん

＊液体シンチレーションカウンター
低いエネルギーのβ線を測定する装置。
ストロンチウム 90、トリチウムなどを測定

までどれだけ苦労してこの活動を一歩ずつ歩んできたのか分かった気がした。こんな事で驚いていては何もできない事も、時のリズムも考え方も、何もかもが違うということも聞いていたが、ここに来て体験して本当に分かった気がした。カルチャーショックもあってか、その晩調子に乗って私はウォッカの洗礼を受けた…。

＊機器は適材適所で有効に

モロヂチノ総合病院の３日目は朝からメンバーの顔に気合が入っていた。エアークリーン装置をはじめ持続吸引機、自動血圧計、麻酔器等トランスを介して異国の地で次々と息を吹き返した機器達を見て少しホッとした。そして病院の担当医師やエンジニアにジーマさんを通し使用説明を行った。この時本当に言葉の壁が厚く、同じ言葉が話せたらどんなにか素晴らしいだろうと、もどかしさを感じた。通訳は５人のスタッフにジーマさん一人であるため、時には身振り手振りで、アイコンタクトを取りながら思いを伝える。時間はかかるが通じたときにはお互いに嬉しく、笑顔でガシッと握手を交わす。ロシア語を勉強しようと感じた瞬間であった。

一通りの説明を終え、分院の小児病院に向かった。２００床の大きな病院であり、ＮＩＣＵ（新生児集中治療室）も日本に負けをとらない位の設備で稼動していた。前回日本より送られた呼吸器が２台あり、チェックをしたが、ヒューズが切れていたり、トランスが足りなかったりで、すぐには使用できなかった。しかし、大切に保管されており部品さえ揃えばすぐにでも使用したいという医師の言葉があり、嬉しかった。また、本院の倉庫で使われずに埋もれていた、微量計付小児用輸液セットを一箱持っていき手渡すと、Ｎ

信州大学附属病院・小池医師と通信する
ベラルーシ国立小児血液がんセンター院長・オリガ・アレイニコワ氏（左）

ＩＣＵの医師は大変喜んでくれた。どんな利点があるのかを伝え、いかに現場で有効的に使用するか、物資を使用する場所を確認していく事が必要で、日本の文化の受け売りでは、物資が生かされないことをつくづく感じた。

患者さんがいるのであれば封を明けどんどん使い捨てとして使用して欲しい旨を伝えると、ディスポーザブル製品は大変貴重で、本人用として繰り返し大切に使っている、使用する最も適した状態にある患者に使うのだという。国が変われば、ディスポーザブル製品一つの価値や使い方も大きく変わってしまう。ここでは日本でいうスタンダードプレコウション（院内感染予防策）なんていうマニュアルは通用するはずもなく、この国の現状を理解し最適の方法を見つけ出す事も、今後の我々の課題であると感じた。

分院を後にして、次の目的地であるゴメリ州へ向け車は走り始めた。さすがに疲れが出たのか車内は30分ほどで静かになり、一仕事を終えた安堵感からか全員が睡魔に襲われ、素直に身を任せた。

ゴメリ州立病院にて

＊倉庫には支援品が山積み

ミンスクより5時間を費やしゴメリのツーリストホテルに到着。夜のミーティングにて、小児血液がんセンターチームの廣浦さんよりエキシン装置の組み立てが終了し、試運転に成功したと報告を受けホッとした。さすがにこの1日は皆疲れており早々ベッドにもぐり込んだ。

翌朝、ゴメリ州立病院に行き、器材の組み立てと、確認を行った。ここでも、届いた荷物がバラバラに保管されており、使用できない器材が幾つか出てしまった。とりあえず、エコーを2台、麻酔器を2台組み立て使用説明を

血圧計を手渡す（右から）藤牧さん・小池さん

した。シリンジポンプ、輸液ポンプを30台余りトランスに接続し作動確認を行った。ポンプ類は一番身近に使用をしてもらえるのか、使用説明に質問がたえなかった。

行方の分からなくなってしまった荷物を確認するため器材倉庫を見せてもらうことになった。おそらくヨーロッパからの支援物資であろうと思われる箱が山積みになり、車椅子やベッド等もたくさんストックされていた。日本から送られた口を開けただけのダンボールも、山積みになっていた。少し哀しくなった。使用してもらわないと意味がない、一つでも多くの支援物資を使い、一人でも多くの患者さんを救う糧にしてほしい。

輸液セットを説明用に持ち出そうとすると、管理を担当する女性が定数をチェックする。在庫管理は徹底しているようだ。こんな状態から、この病院には様々な物資が他国から支援され、次々に送られてきているのが想像できる。がっかりもしたが考えてみると、これもそれぞれの国の受け売りで偽善の自己満足でしかないような気がしてならなかった。

＊支援品を有効利用してもらうには

日本の医療は目まぐるしく発展し、大型の機械ですらいわばディスポーザブルの扱い。要するにいらなくなったものを「まだ十分使えるから」と、医療物資としてこの国へ送り込む。国の水準は違うにせよ、使用しなくなった物を「貴重なものです、大切に使って下さい」と、説明しても余り説得力はない。「日本では捨てるものでしょ?」と、言われればそのとおりである。まあ、これは極端な考え方ではあるが、少なからず私たちはたくさんの日本人の思いを、こうした医療物資という形でこの国に届け、それを有効的に使

支援したライフスコープはさっそく使われた

用してもらえるよう、一人でも多くの子供達を救えるように、今ここへ代表として来ている。これは決して受け売りでも、偽善でもない。この気持ちを理解してもらうためには、もっともっと日本人がベラルーシという国の考え方や背景を理解し、私たちに今できることを的確に浮かび上がらせる事がまず必要である。私たちも本来のディスポーザブルの言葉の趣旨をもう一度見直す必要があるのではないかと感じた。

州立病院に着いた荷物の中に、ゴメリ腫瘍病院へ送る麻酔器と呼吸器が届いていた。新しい型の麻酔器と呼吸器に医師たちは興味があるようであった。この病院では中央配管が、酸素のみで他の配管がないため、この機器は使用できない物である。しかし、税関を通す際、ちょっとしたトラブルで、州立病院が管理の権限を得ているため、機器を腫瘍病院に送ることを許可してもらえず、結局腫瘍病院には設置することができなかった。この件については、神谷事務局長さん、イリーナさんが苦労され最終日に何とか腫瘍病院に転送する約束書面をとりつけた。

＊小児血液病棟の子ども達

ゴメリ最終日、病院のＮＩＣＵと血液病棟を見学させてもらった。ＮＩＣＵではわずか８００ｇの未熟児が保育器の中で生きようとがんばっていた。我々が先ほどチェックしたばかりのシリンジポンプが既に３台設置してあり、点滴ルートの先は未熟児の身体に繋がっていた。小児科の医師は大変ありがたいとポンプを指差した。目から鱗とはまさにこのことであった。小児血液病棟では個室に、恐らく白血病だと思われる男の子がいた。日本から持ってきた、小さな組み立て式飛行機のおもちゃを手渡した。「スパシーバ」

彼はそう言ってすぐにベッドに戻ってしまった。別室にもう一人小さな女の子が入院していた。ママが外出中で寂しいと泣いていた。女の子には折り紙と、おはじきを手渡した。突然異国のおじさんが部屋に入ってきたからビックリして泣き声はさらに大きくなった。サンタクロースの格好でもしてくればよかった。時間がなく交流は持てなかったがベラルーシで苦しむ子供たちの顔を目の当たりにした。今回、私がここに来てこの子達を救う力に少しでもなれただろうか。逆に、この胸に飛び込んできたことが多すぎて、何もできなかったような気がする。この二人の子供の顔は生涯忘れることはできない。

ゴメリを後にする列車の窓から流れていく街の灯をながめながら、さまざまなことを考えた。くやしいけれど、任務をやり遂げたという満足感はなかった。

後ろ髪を引くようにモスクワは今年初の積雪で成田行きの飛行機は８時間の足止めをくらった。帰りは皆無口であった。それぞれの思いが心の中を巡っているのだろうと思った。幸運にも帰りの飛行機は窓際の席に座ることができた。雪に消え行くこの美しい国に必ずまた来ることを心に誓った。

おわりに

今回ＪＣＦ第64次訪問団の一員として参加できたことを誇りに思い、きっかけをくださったＪＣＦをはじめ、優しく頼もしい臨床工学技士の皆さん、一生懸命日本人のハートを通訳してくださったイリーナさん、ジーマさん他たくさんの方々に感謝の気持ちで一杯です。この旅は私の心の財産の一つになりました。

「アグロームナエ・ヴァム・スパシーバ（ほんとうにありがとうございました）」

第 64 次訪問団メンバー：

・藤牧久芳（波田総合病院：臨床工学技士）・小池保寛（エム・イー：臨床工学技士）

・宮澤英典（諏訪中央病院：看護師）・ 廣浦学（諏訪中央病院：臨床工学技士）

・西澤英次（上條機械店：臨床工学技士）・樹神哲郎（ビー・ブラウン：臨床工学技士）

日本からのサポート

・岡本辰成（中日本メディカルリンク・臨床工学技士）

冬将軍の贈り物

小池 保寛（エム・イー山梨）

「昼御飯はあそこに行きましょう」と、赤十字ドライバーのジーマが言う。モロヂチノ郊外にその店はあった。辺りいったいは何もないが、ひっそり建っている店の外観がなぜかとても暖かいのだ。煙突から出ている白い煙をみると冷え込んだ体に再び活力が湧いてきた。店内は落ち着きあるログハウス風になっていて、中央には小さな暖炉がある。炎が出迎えてくれた。ジーマはきっと奥さんをここへ連れてきたのだろう。この雰囲気なら連れて来たくもなるよね。名物のシシカバブはその牛肉の美味さと焼き加減が相まって絶品だ。

炎とスープとシシカバブで、お腹も体もこれから４００キロの移動に耐えられる状態になった。そう、これから４００キロ先のゴメリまでジーマが操る車で移動するのだ。

辺りは日も落ちすっかり暗くなっていた。連日の疲れから車中のメンバーは深い眠りに就いていた。ふっと、小さな炎が目に入った。しばらくするとまた炎だ。何だろう、注意して車窓から覗いてみると、焚火をしていたのだ。それもバス停のまえで、バスが来るまで人々が焚火を囲んで話をしていたのだ。バス停の度にそうした炎を目にした。

無くしてしまった物を見つけ出した、そんなあったかい感動があった。空を見上げるとそこは１８０度のプラネタリュームだった。北斗七星はじめ、星の数ってこんなにあったのかなと思わせるほどの圧倒的な数だ。一瞬の間、その幻想的な世界に酔っていた。

４時間の長旅を終え、ゴメリのホテルに到着した。高い建物と華やかな明かりと、どんよりと覆いかぶす厚い雲で星は見えない。あの一瞬の出来事は宝物になった。

医療機器支援で３回目の渡航になった。この国の時間の進み方も充分理解している。日本とは一緒にしてはいけないのだ。暖炉を眺めながらゆっくり食事をすること、バスを待つ間、友人達と焚火をして話し込むことなど、時間はゆっくりと過ぎていく。時間の流れの違いを改めて感じ、この国で支援を続ける難しさとやりがいを確信した。

人類が初めて火を使いはじめてどの位経つのだろう。その火は暖炉の火として、焚火の炎として、原子炉として形を変えて現代に受け継がれている。人に暖かさを与える火、人に恐怖を植え付ける火、様々だ。そして、命という火。けっして途絶えてはいけない火である。

そのための支援の方法を今一度考えてもいいと考えた。この国に合わせた時間でゆっくり考えてもいいと。ゆっくり歩けばいろいろな物が見えてくる。見えなかった物が見えてくる。そう、慌てるなよ、火を囲んで話そうぜ、ここはベラルーシなんだよ。

冬将軍がそう言っているような気がしたのだ。あのバス停の焚火も、あの星空もきっと冬将軍からの贈り物なのかな。

カチャ、と銀色のジッポライターの音がした。振り返ると４時間の運転を終え、お気に入りの煙草で一服しているジーマがいた。煙草の火、それも同じ火だね。苦笑して重い荷物をもっていつものホテルに入った。

ＪＣＦ・私・そしてベラルーシ

白柳 淳（ギタリスト）

アレクセイとラテンの曲を

私はこの度念願かなってベラルーシのドゥヂチ村、ブジシチェ村を訪れた。２００１年６月に「ナージャの村」を映画館で観た私が、本橋監督の生き方にエールを送ろうと「地球（ふるさと）への祈り」を作曲して、約１年４カ月後のことである。

そしてＣＤに入れる前に本橋監督に会うべく連絡を取った後、招待された「アレクセイと泉」ゼロ号試写会。そこには、映画のパンフレットに名前を連ねる方々が完成を喜び合うべく集まっていた。そんな中にぽつんといた私を、本橋さんが皆に話し回ってくれた。「上田で『ナージャの村』を観て感じて下さって、私に曲を書いてくれたギタリストだ」と。私はここでＪＣＦの神谷さんに会った。

それから後日、松本のＪＣＦを訪れた私は、日本で使われなくなった医療機器をベラルーシに送り、現地にエンジニアを派遣し、現地の病院がそれを

使えるよう設置していると聞いた。

そう聞いていた私の前に突きつけられた現実は大変なものだった。子供達のために一刻を争って送った機械と、強硬なスケジュールで働くエンジニアを足止めする税関が、とても無気力なものに思えた。そしてこの国ではメディカル・エンジニアのシステムがなく、日本から行ったエンジニアに対し、何をする人か理解しようともしない病院関係者もいるのではないだろうか。日本の支援物資が病院内の売店で販売されていたり、また倉庫には外国からの支援品が放置されている現実。こんな風に使われているのかと、私は全てが嫌になった。

帰国後、私は、依頼されたグランドゼロという機関誌への寄稿をいったん断った。こんな事を私は伝えられないと。布山さんには申し訳なかったが、期待には応えられそうになかったのだ。

しかし私は思い起こしてみた。１００キログラムの鉛の箱を現地のスタッフと運び込んだときの連帯感。機械が使えるようになったことを細かく伝えてくる喜びの声。長期入院の子供の前で演奏したとき、「バイオリンを弾きたいけどどうしたらいいですか」と聞いてきた子供の表情。「何があってもそう思い続けたら必ずできる」と答えた私の言葉を伝えてくれた神谷さん。

自分の利益のためだけに生きる人の中に生きているように感じて疲れてしまうことはないだろうか。親のうらみをはらすべく育った子供は、全て何のためらいもなく争いを繰り返していくのだろうか。

人間に食べられるくらいなら死んだ方がましだと考える家畜や野菜はいない。初めから生きることをためらう子供はいないのだ。人は大人になると失っていくものもある。しかし持っていても見えなくなったり、気付かなくなったりしているものもある。

本橋さんが写真や映画で伝えようとしていること。私が音に込めようともがいているもの。ＪＣＦの医療支援を支えているもの。この旅で新たなスタートラインに立った私には、それは希望と呼ばれているもののように思える。

大きくなったナージャと

ポレーシェ学校一般健診

次年度は事前準備から見直しを

11月11日、大雪で飛行機発着が混乱しているモスクワのシェレメチェボ空港に、ポレーシェ学校の健康診断のために、第65次訪問団5人が到着した。強行スケジュールでチェチェルスクに入った一行をチェチェルスク病院長は「健診はもう終わりました」と言って迎えた。どうして早く連絡してくれなかったのか。憤懣（ふんまん）が爆発した。院長自身も最近まで知らなかった、と言う。ゴメリの特別病院の検診車が汚染地域の子どもと大人の甲状腺、血液、内分泌検査を行ったそうだ。こんな事は事故後15年目にして初めてです、とチェチェルスク保健局のターニャさんは言う。

でも、3年間ポレーシェ学校の健診を続けてきて、データを蓄積しているのは、JCFの健診だからと気を取り直してポレーシェ学校に向かった。

健診を形通り終えて、学校の先生達と健診について、懇談した。

子ども達の健康診断は、サナトリウム保養前に年2回行うことになっている。しかし、ポレーシェの集団農場では9月からお給料も出ていない。健診を受けた子どもの中に甲状腺手術を受けた後、ビタミンE剤を飲んでいない子がいた。経済不安の中で、子ども達の健康サポートをどう取り組んでいくか、課題が残った。

また、2002年、健康診断を実施した特別病院は、WHO、EUとの資本出資で、ゴメリ郊外にベッド数400床と外来機能を持つ病院としてスタートした。今後の健診計画を聞くと、日本の医療者と協働して行いたいと希望された。次年度は、事前準備からしきり直しで、健康診断での協働ができるか話し合っていきたい。

（事務局・神谷）

健診をふりかえって

衣川 直子（昭和大学医学部小児科）

ポレーシェ学校にて採血

第65次訪問団は2002年11月11日から17日までの7日間に渡って、医師1名、看護師2名、一般2名の6名により、前々回に引き続き3回目の健診を行った。対象は高汚染の森に囲まれたゴメリ州チェチェルスク地区ポレーシェ学校児童約150人で、当初の計画では甲状腺検査と血液検査を行い、甲状腺、血液疾患の早期発見を目的とした。

しかし、訪問前のときには予想されなかった事項として、直前に同様の検診が特別病院によって行われており、受診者が減少したことと、甲状腺の超音波エコー検査が施行されなかったことがあげられる。

そのため8月に行われた各個人の記録を出してもらい照合を試みたところ、問診や既往歴の部分が参考事項として重要と思われたので、今回のJCFの健診結果ではないが以下に記載した。その内訳は甲状腺腫、う歯、アデ

ノイド肥大、鼻咽頭炎、脊柱側弯症、肝炎、心炎、慢性胃炎、睾丸炎、心雑音、尿路感染症、肥満、易感染性などであった。また、高学年になると健診後に内科医や整形外科医、神経科医への受診を薦める記載があり、経過観察の必要性が伝えられていた。

次に実際の健診結果であるが、甲状腺疾患の健診は先に記載したように今回は甲状腺のエコーが3ヶ月前に施行されていたため触診のみであったが、正直のところあまり小児科医としては日常診療上行っていなかったためその結果については自信がなくあえて、健診表に記録しなかった。

血液検査は血球計算のみの項目で2日間に渡って行われたが、採血を施行したのは31名のみであった。この被採血者が少なかった理由は直前に比較的におおがかりな健診が行われたことも影響したが、学校側から検査の結果が還ってこないことも原因と教えていただき、結果はなんらかの形で保護者に伝えるということで被採血者数を増やすよう努力した。

白血球数の異常は高値が2名で認められ、10,800/μℓと10,900/μℓで、血液分画で正常範囲ではあるが、好中球分画が上昇していた。うち1名は現病歴の慢性胃炎の記載との関連が示唆された。赤血球数の異常は低値が2名で認められ、ヘモグロビン値が9.5g/dℓと9.6g/dℓであった。うち1名は現病歴の慢性胃炎の記載との関連が示唆された。血小板数異常は認められなかった。

検査両日とも非常に寒く、慣れない日本人の私たちには堪えたが、受診した児童たちは元気そのものであった。保健室の提供や暖かい学校給食の提供をいただき順調に健診を終了できた。

昼食後はチェチェルスク地区病院にて、ＪＣＦよりこの病院に送られた血球計算機を使用し測定した。協力してくれた検査室のエレーナ医師は非常に熱心で第2日にはヘマトクッリト（血液全体に対する赤血球の割合）がやや高めということで機械の洗浄からやりなおしたため、時間がかかったが大切な健診の検体であるから当然のことであり、辛抱強く待つこととした。近くにはこの病院を受診する患者用の耳朶血の採血用セットが置いてあり、日本ではほとんどがディスポーザブル注射器で採血していることと対照的な印象が残った。

また、エレーナ医師に白血球数が高い児童の血液のスライド標本（ストリッヒ）を作成していただいて、日本で染色し鏡検したが異常な形態の白血球は認められず白血病などは否定された。

2日間の健診終了後、教職員の方たちに集まっていただき、特に異常を有する児童はないことを報告した。今回の被採血者数が少なかったことと先行して行われた健診との関連や、整合性などについての議論はなかった。

その後、今回の第2の目的として、ゴメリ州立病院小児血液病棟に入院中のこどもたちにお土産を渡し、力丸さんを中心に子供たちに紙芝居を披露した。また、そこのＩＣＵ病棟でわずか20分であったが、わたくしはミーシャ医師との約10年ぶりの再会を果たしたがずっと逞しくなられ、医師としてのハイライトというべき瞬間を経験できた。彼はＪＣＦの招聘研修事業で信州大学で研修していたが、リフレッシュのためと私がロシア語がわかるということで、当時の小児科教授の小宮山淳先生の紹介で私が勤務していた千葉県こども病院で1週間の研修をされたことがあった。今回、お会いしたときは病床のタチアナ医師に替わり、移植部

採血する安楽さん（左）

10年ぶりの再会を果たした衣川医師とミーシャ医師

の主任として信州大学小児科の指導のもと白血病患者の自己末梢血幹細胞移植を行うなど先進的医療に携わっておられた。あらためて息の長いＪＣＦの援助のかたちとここまで何回も声をかけてくださったＪＣＦへの感謝の念にかられた。

この報告書をまとめるにあたり、甲状腺エコー検査の前年度２００１年の健診票を参照したところ４名に結節性甲状腺腫張が記録されていたが、今回も受診したのはうち２名であった。受診しなかった２名は現在は17歳と18歳になっており、学校を卒業したと考えられた。残りの２名は受診しており、15歳であったが、うち１人は甲状腺末服用の指示がされていたが現在は服用していなかった。この同じ児童が告白したのではないが、報告書を書きながら甲状腺末が買えないのだともらした13歳女生徒のことを思い出し、健診の意義と方向性を考察するべきことを痛感した。

血液検査では今回の健診で２名の白血球数増加が認められたが、いまのところ白血病などの疑いはなかった。また前年の２００１年に貧血傾向や血算異常の疑いとされていた児童の今年の変化をみたが、連続して２年間の採血をしていたのは７名のみであり、今年になってからの異常はなかった。

今回の被採血者数が少なかったことと先行して行われた健診との関連や、整合性などについてＪＣＦがこのままの形で健診を継続するのかどうかを検討する必要性を認識した。

モスクワ便り

時は早く流れて、私たちはまた新年に入りました。多くの人々にとってお正月は子供のころから一番楽しくて望みの祭りです。ロシアに新年の雰囲気は、クリスマス・トリー、小さなプレゼント、針葉とミカンの香り、シャンペンと「オリビエー」サラダなどです。この祭りは小さな子供でも徹夜が許されます。普通お正月のパーティの準備がずっと前に始まりますが、祭りそのものよりこの準備の方が楽しみであるという風に言われています。

お正月にクリスマス・トリーが要りますか。
- 50.1％ --- ぜひ本物のが要る。
- 27％ --- 何とも要らない。
- 21.4％ --- 人造でいい。
- 1.5％ --- 分からない。

いつお正月の準備を始めますか。
- 24.1％ ---1 週間前。
- 22.4％ ---1 ヶ月前。
- 18.9％ ---2 週間前。
- 12.4％ ---3 日前。
- 11.8％ --- 直前。
- 9.8％ --- 分からない。

「オリビエー」サラダをご存知でしょうか。そうであると思います。このサラダは外国に「ロシア・サラダ」としてよく知られています。サラダは 150 年以上の歴史を持っていますが、19 世紀と今の作り方はずいぶん違います。この大好きな「サラダ・ストリ」と両方の作り方を次の「モスクワ日記」にお知らせしましょう。

イリーナ・ニコラエバ（ＪＣＦモスクワ事務局）

お互いを尊重し長期的な支援を

国井 真波（看護師）

採血する国井さん

17年前、チェルノブイリ原発事故が起きた時、私は小学校6年生になったばかりだった。「外国で大変なことが起こった」という漠然とした不安を感じたことは今でも覚えている。

今回、ＪＣＦのスタディーツアーに参加したことは、私の人生の中でとても大きな出来事であり、必然のことだったように思える。

今回の訪問で私が学んだことは主に2つある。まずひとつは、援助の難しさである。11月の健診では、トラブルが発生して健診がスムーズに進まなかった。援助とは、受ける側が主体にならなければ成り立たないと思うのだが、いくら私たちが今のポレーシェ学校に必要な援助を考え、提案しても、学校側は「してくれるというのだから、してもらおう」といった受身の姿勢であったように感じた。健診とは、定期的に継続することに意味があり、正確なデータを得て、適切な処置をするために必要なことである。しかし、ポレーシェでは健診に対する意識が私たちと異なり、現状のやり方に危機感を持っていないようであった。初めて訪問した私にでさえ、両者の意識の違いが感じられたのだから、今後の健診のあり方について、再検討していく必要がでてくるのではないだろうか。社会背景が違うのだから、意識や考え方が異なるのは当然であり、お互いを尊重しつつ相手主体の援助をどのように行っていくのか。援助とは一朝一夕でいかないものだと改めて感じた。

痛くないように。安楽さん、国井さん

ふたつめは、ＮＧＯ同士が手を取り合う必要性である。私は今回の訪問で、ベラルーシの経済状態について考えさせられた。日本がＯＤＡ（政府開発援助）を打ち切ったという事実。甲状腺のオペを行っても、必要な薬品が手に入らず、継続した治療を受けられない子供たちが多いという現状。医療援助の限界を目の当たりにした。以前聞いたことがある、「いくら私たちが援助をしても新生児死亡率は低下しなかったのに、国内の経済状態が良くなってから、新生児死亡率が急に低下しはじめた」という、あるドクターの話を思い出した。医療援助はとても必要なことである。しかし、単独で援助をするのではなく、さまざまなＮＧＯや国際機関と情報を共有しあい手を取り合って援助していく必要性を実感した。

私は帰国後、フェアトレードのＮＧＯに就職したのだが、経済面や医療面だけでなく、教育、人権などさまざまな視点で援助を行っていきたいと思っている。

森サンタ大活躍
健診チームの緊張も和らぐ

森 みゆき（病院勤務）

グランドゼロを読んでいる皆さんへ。こんにちは。私、名古屋市在住の病院勤務、ヘルパーをしております森みゆきと申します。この度はじめてチェルノブイリ原発事故の被災地、ベラルーシへのボランティアに参加させていただいて、大変心豊かな経験になりました。

アエロフロートの機内の中も、10時間の長旅とは思えないほど楽しく過ごせました。モスクワ―ミンスクまでの寝台列車、仲間と一緒に早起きをして朝日を見ようと約束したものの、あいにくの曇り空…。夜間、列車の窓から見える民家には灯りが。私のイメージでは「ペチカ？」と思いましたが、電気は通っているそうです。

朝、列車はベラルーシのミンスク到着。想像以上に繁栄していて、目に入ったのは建ち並ぶ団地住宅の棟。通訳のイリーナさんに一般人は入居できるのか、産業は何があるのか、年金、医療品を輸入に頼っているけれど、その税金は…返事は先行き不透明でした。ミンスクを後に、大平原の雪の中の一本道をひたすらゴメリへ車で移動します。

明日はチェチェルスク地区の子供達と会う日です。宿泊先に着いてから、採血、プレゼントの用意で忙しかったです。

当日、私は子供達の恐怖心を取るため、サンタクロースに変装しました。最初は子供達もびっくり、気恥ずかしさやひやかし、てれもありましたが、言葉は通じなくても、言い表せないコミュニケーションが生まれた気がしました。瞳をのぞき込むと、きれいな目で見つめ返し、「スパシーバ」。サンタクロースを夢見ている純粋な子供達です。

その後、私達は学校給食を食べました。被災地で採れた食べ物です。抵抗はありませんでしたが、舌に突き刺さるような後味…。毎日、毎食あれを食べているのだろうかと痛感しました。

チェチェルスク地区の活動も終わり、ゴメリ州立病院、小児血液科の訪問です。発病しているとはいえ、育ち盛りの子供達です。皆とても元気で、

エネルギーが有り余っている感じがしましたが、残念というか、くやしいというか、来年再び会えるのは3分の1の確率だそうです。胸が熱くなります。

ゴメリの宿泊先で現地の大学生の女の子と話をする機会がありました。

『凡人は同情で生きる』ということわざがあります。私は彼女にあいさつ程度の英語を話しかけてみました。あいにく通じませんでした。おもわずボランティア仲間の安楽看護婦さんにつぶやいてしまいました。「レベルが低いんじゃないの？」と。安楽さんは愛情を持って「この国の人達は英語が話せなくても歴史が語れる」と言いました。その時頭をよぎったのが前述のことわざです。

歴史が語れるのならば、伝えなくてはいけない。

外国からの支援で生きていてはいけない。それが当然と思うから開封もされない物資がゴロゴロしていて、結局苦しむのは子供達…。放射能被災地の次世代の若者であって世界へ問いかけることはないのだろうか？国の体制に満足なのだろうか？私は彼女に聞きました。「大学を卒業したらモスクワへ出るの？」答えは「出ない」とのこと…。

宿泊先のホテルマン、年齢は27歳くらい。彼は少し英語が話せました。東京に2日間滞在したことがあるらしいです。彼は「日本人もアメリカ人も英国人も、ベラルーシという国すら知らない。ロシアもノータッチだ」と言っていました。

前回のグランドゼロに、ロシア、ベラルーシ通貨統合を、ベラルーシのルカシェンコ大統領断る、の記事が載っていました。当然です。物価が値上がりしてインフレになるのはわかりきっています。社会保障、医療支援等々ないのだろうか？そうすれば強い汚染地の人々を町へ呼ぶことができるのに。でもそれが彼らにとって幸せとは限らない。

文化があって文明のない聖地のようなものを感じさせる国だなって、日本に帰って思ったりもします。ベラルーシの若者に言いたいです。「世界へ何かを問いかけて欲しい」と。

最後に小児科の衣川先生と帰路につく際、チェチェルスク地区には歯医者はあったっけ？と話しました。心配です。

ボランティアを終えて…

森さんの友人手作りのお面を一人一人にプレゼント

文通で不安と孤独を訴えた現地少女との再会

力丸 邦子（主婦）

その日、ゴメリ州立病院小児科病棟のプレイルームでは、子ども達が私達の到着を待っていました。森さん扮するサンタクロースの登場に子ども達は驚き、顔を綻ばせました。日本の昔話の紙芝居が始まると、クリクリしたその眸をさらに見開き、サッと場面が変わり、鬼ばあばが大入道に変身すると口元を押さえて見入っていました。その緊張をほぐすように手あそびに転じると、こぼれるような笑顔がたくさん見えました。安楽さんが子ども達と一緒に体を揺すって盛り上げてくれました。続く昔話の絵本では「さあ残りのお餅はあといくつ?」と促すと指を折って「3つ!」「2つ!」とまちまちの答えながらも話の中に入ってくれました。この日本の昔話をいつまでも楽しんで欲しくて本を1ページづつコピーし、絵本に仕上げ今回のお土産としてひとりづつに渡しました。ロシア語読みと日本語読みの両方がついているどこにもない一冊です。どの子どもも喜んでくれて…と書きたいところですが、初めから終わりまで一度も笑ってくれなかった男の子がひとりいました。この中では一番年長かと思える顔立ちで、頬を緩ませることさえなかったのです。

私は縁あって、ベラルーシの子ども達と文通しています。「入退院を繰り返している」「病院を転々としている」「また、点滴中」「放射線治療の苦しさ

手作り小物は日本からのお土産

にイラ立っている」子ども自身、あるいは母親からの手紙に、直ぐにも入院先を訪ね元気づけてやりたいと思います。と同時に未だにチェルノブイリから解き放たれていないことを感じます。

99年12月、ターニャという少女から「私が入院している病院にあなたと同じ髪の毛の黒い人達が慰問に来て私を

力丸さんの紙芝居に夢中

入院中の子どもたちに日本の民話をプレゼント（ゴメリ州立病院）

励ましてくれました。不安と孤独の中にいる私はとても嬉しかった。もし、あなたの知っている人ならばありがとうと伝えてください」と手紙が来ました。『不安と孤独の中にいる』この言葉にターニャの、この国の子ども達の悲しみと抱えているものの深さを想いました。病院を訪ね、子ども達を元気づけたいとの私の思いはさらに強くなり、その機会を待つようになりました。そして、とうとう今回ＪＣＦに同行させてもらえゴメリの病院を訪ねることができたのです。あの男の子も『不安と孤独の中に』いるのでしょうか。あの子に、また会いに行きたい。その時は、ミンスクの病院も、地域の小さな病院も訪ね、ひとりでも多くの子どもに声をかけたいと思います。今回の旅で2年ぶりにターニャに会えました。彼女は今、小学校の先生になるため専門学校に通っています。他にもホテルに訪ねてくれたり、ゴメリを発つ時に母親と共に駅まで見送りに来てくれた子ども達もいました。束の間の再会でしたが元気そうな姿に安堵した旅でもありました。同行された皆さんが、私を訪ねて来た子ども達に暖かい言葉をかけてくださり、うれしかったです。

みなさん、いい旅をありがとうございました。

那珂町通信

原子力災害から身を守るために

谷田部裕子
（ナージャの輪）

3年半前に起こったＪＣＯ臨界事故の時、私たち周辺住民はどうしていいのかわからず、家族への連絡もままならずに戸惑っておりました。事故の広報が遅れて、ＪＣＯの近くで長い時間を過ごしてしまった人たちもいました。私は、屋内退避勧告が出された後も、外には出ない方がいいのか、それとも遠くに逃げた方がいいのか判断する材料も知恵もなく、ただただテレビ画面を凝視していました。水を飲んでも大丈夫なのか、何を食べたらいいのかさえわかりませんでした。あの日の体験は、今も、被ばくの不安、事故再発の不安とともに気持ちの中から消え去りません。

そんな中で、「ＮＧＯ原子力防災研究会」に入りました。会は、原子力事故が起こったとき、周辺住民に情報や指示が一刻も早く伝えられるにはどうすればいいのか、住民が速やかに避難するためにはどうしたらいいのかなどについて、住民の立場で考える必要性から、ＪＣＯ臨界事故一年後に立ち上げられました。個人の立場で参加でき、原子力防災について平等に議論しあえる場です。

原子力防災研究会の活動の中で、原子力災害から住民の安全を守るための避難マニュアル「避難心得帳」の作成を検討してきました。誰にもわかりやすく、役立つようにと願って、多くの人々の協力で、この程試作版が出来上がりました。つきましては

●たくさんの人の手にとっていただき、ご意見をお寄せいただきたく存じます。ボランティア活動ゆえ有料ですが、どうぞご支援下さい。よろしくお願いいたします。

●大事故が起きれば焼け石に水かもしれないけど、少しでもなんとかできる場合だってあるだろうし、取りあえずやれることをしていきたいと思っています。

「避難心得帳」より

避難心得帳＜試作版＞
発行：ＮＧＯ原子力防災研究会
1 部 300 円 (送料別。但し 10 部以上は当方負担)
申込先
ファックス：029-295-4617
郵送：
〒 310-0107
茨城県那珂郡那珂町額田南郷 2538-32
谷田部裕子

連載随筆

コ・プレゼンス

NO.11

宮尾彰

～「ケア」の原点について～

お前やそのような体して生まれてきたが、魂だけは、そこらわたりの
子どもとくらぶれば、天と地のごつお前の魂のほうがずんと深かわい。

石牟礼道子『苦海浄土』第四章・天の魚　より

写真提供　本橋成一

介護保険に続いて、障害者福祉の分野でも介助という営みが商品化されつつある。本来きわめて測りにくいものが、目に見えて数えられる「サービス」という衣に身を包む。

介助者（教師）は、その物理的な力でかかわっている子を立たせているのではない。この子は、教師がかたわらに（一歩さがった位置に）控えていて、軽く「ささえる」という行為を契機にして、自分の力で「立つ」ことができるようになっているのである。教師が軽くささえる、あるいは「そこに居る」ということ自体が、その子の立つということへの介助になっているのかもしれない。

これは今からおよそ二十年前に、ある一枚の写真について、ひとりの哲学者が残した洞察である。そして写真は福島県のとある重度心身障害児（者）施設の職員によって撮影されたものだ（林竹二『教育の根底にあるもの』・径書房）。この一節に接した当時、まだ学生だった私には「介助」という言葉についての

写真提供　本橋成一

いかなる認識もなかった。

紆余曲折を経て、私自身がこの「介助」という言葉の意味を反芻しながら生活することになった。今こうして私は、同じ文章を「そこに居る」べき一人として読み直している。

晩年林は、その思索の実践である〝授業巡礼〟を経て「ひどく深くその力が『眠りこんで』いて、呼びおこすのに特別の困難がある」障害児教育を教育の原点に据えた。「それを呼びさますために、あれこれの働きかけにたいする子どもらの示す、かすかな、あるいは、ときとして顕著な反応についてのどんなわずかの経験もたいせつに胸にきざんでおいて、持ちよりながら、いかに子どもの内面を読みとるかを考えあいながら、つぎの手段、手だてをさがしてゆく。…」

先の写真には「私がこの子を立たせてみせよう」という企図や「何とかして立たなきゃ」という強迫から自由にされて、どちらからともなく寄り添い合う二人の人間の姿がある。これは決して一朝一夕に成り立った出来事ではない。地道に繰り返される日々のかかわり合いを通して、ようやく二人の間に親密な委ね合いの関係が培われたのに違いない。詰まる所、「一緒にそこに居る」(co-presence)という至極単純な行為の内に、すでに「介助」が始まっているのだ。期せずして、介助とは人間が存在の深みにおいて出会う機縁であり、そこで私たちは相互に立場を超えてひとつの経験を分かち合う。

それが「商品」として扱われる時代においても、介助という営みの本来依拠するところは自ずから外にある。老いた哲学者は、それを〝魂の世話〟と呼んだ。私には、彼のまなざしが、総じて「ケア」と称されるすべての営みを見据えていたように思われてならない。

АНЕКДОТ

◆Священник, находящийся рядом с умирающим, рассказывает тому о прелестях загробной жизни. Однако умирающий возражает:
- Святой отец, как вы можете быть в этом уверены? Ведь оттуда еще никто не вернулся и не рассказал, как там хорошо.
- Вот-вот, именно поэтому оттуда никто не возвращается.

◆Сколько водки ни пей, - вздыхал алкоголик Сидорчук, - а организм все равно на 90% состоит из воды!

◆Ехал мужик по деревне и сбил петуха. Останавливается, подбирает петуха и приходит с ним к хозяину:
- Я бы хотел заменить вам этого петушка.
- Нет проблем. Куры - в курятнике.

-
◆Два сердца соединились - что это означает?
- Бардак в операционной.
-
◆Если вас мучает бессонница, примите слабительное. Уснуть вы все равно не уснете, но по крайней мере вам будет чем заняться.

ジーマの

ロシア小話

◆死に際の人の側で神父さんは素晴らしい死後の生活について話している。
しかし、死にかけた人は質問する。
「神父さん、貴方は何故そんなに信仰深いのか？あそこから戻り、そのよさを証言した人は誰ひとりいないじゃないか」
「そう、そう。だからこそあそこから戻る奴はいないのよ」

◆「ウオッカをいくら飲んでも」、
アルコール中毒者のシドルチュックさんは、ため息をついた。
「体内水分は９０％と変わらない」

◆ある男が田舎で運転中に、雄鶏をひいた。
雄鶏を持って、その主人の所に行った。
「この雄鶏の代わりに何かしてあげたい」
「ノウプロブレムだ。雌鳥が鶏小屋にいる」

◆『２つのハートが一緒になった。』
それはどいう意味なのか？
—オペ室の中で混乱しているだけだ。

◆あなたが不眠症を煩っているのならば、下剤を飲みなさい。寝ても寝なくても同じ。結局あなたは、何かをすべきことになる。

——ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート———

若者の声

会員さんからの声

～チェルノブイリに寄せる思い～

ＪＣＦの活動を国際理解・国際協力として、報告する機会が増えてきた。特に、高校生や大学生にスライドを使って10年の関わりを伝えた時、彼らの鮮烈な感想がたくさん返ってきた。私たちが受け取ったものを、新たな世代につないでいく。時には厳しかったり、時には大切なエッセンスをしっかり受けとめてくれたり、そんなキャッチボールの一端を紹介したい。

ベラルーシの食卓

希望サラダ

冬至以来１日１分ずつ日が延びています。感覚的ではなく、しっかり太陽と月の出入り時刻が記載されている日めくりカレンダーをベラルーシで見つけました。おまけに、日にちをめくっていたら、裏には食卓コーディネイトから料理メニューまで載っています。

毎日、厳しい寒さが続いていますが、ベラルーシも勿論たいへんです。マイナス20度を越える寒さの中で、みんなどうしているだろうと、犬のバウチョクや猫のコーチェクの顔まで浮かんできます。

こんな日々の裏ページにサラダ＜ナジェージダ（希望）＞。寒い雪道を歩きながら、桜の枝の芽がわずかに膨らみつつあるように見えるのは、厳冬の中に春を思う、潜在的な＜のぞみ＞なのかもしれない。今日も雪かきから１日が始まった。こんな日は＜希望＞という名のサラダを食してみよう。

＜材料＞

・生きのこ（シャンピニオン）400ｇ・小玉葱　３個
・ピクルスキュウリ　２・ニンニク　２・グリーンピース　４匙
・タマゴ　３個・チーズ　100ｇ・香辛野菜　少々・マヨネーズ　400ｇ

＜作り方＞

1. 火を通したきのこを小さく刻み、マヨネーズであえる。
2. その上に火を通した玉葱、マヨネーズ、そして、薄くスライスしたキュウリピクルス、マヨネーズ、ニンニクつぶしでニンニク汁をかけた鶏肉、マヨネーズ、火を通した玉葱、缶詰グリーンピース、マヨネーズ、ゆで卵のみじん切りを重ねる。
3. おろし金でおろしたチーズ、マヨネーズ、そして、てっぺんに緑の香辛野菜をみじん切りにして散らす。

信州大学教養講座 NGO/NPO 論の船津和幸先生から、地元で実際に活動している市民活動団体に実践を通した活動と意義・課題について学生達に話してほしい、と依頼があった。3 回の講義時間の中で、ＪＣＦの 12 年間の活動の歩みと国内広報の方法、「アレクセイと泉」のビデオを見てもらった。1 回目のスライドを使いながら話した活動概要の感想を提出してもらったところ、学生達から素晴らしく的を射た指摘が返ってきた。若者たちにきちんと伝えていくことで、流れていく時代に共に関わっていこう、新しい国際協力と支援を創っていこう、と勇気がわいてきた。

大沢 夏海

「足に根っこがはえちゃったんだよ」

一番心に残った事だ。その土地に残ったおばあちゃんが言ったという言葉。放射能に汚染された土地で野菜を作り、汚染された環境で生活している人たち。根をはっているのはどんな大地なのだろう。訪れてみたいと思った。きっとそこには、何にも変えられないものがあるのだろう。本当の豊かさとは？福祉や医療が発達していると？私は自分が愛する土地で安心して暮らせることだと感じた。そのために時には福祉や医療が必要な時もあるのだ。この国では、必要な時にそれがなかった。だから今でも事故は起き続けているのだ。でも、それを解決するために努力している人たちがいる。その事故さえ知らない人もいる。改めて国際交流について考えた。本当の豊かさを求める私たちはこれから何をしていくべきなのだろうか。これから生まれてくる子ども達に何ができるのだろうか。それをまずは考えようと思えたことが、私にとって成長だったと思う。

堀井 將生

僕は「小さな生命」という言葉を使いたくない。生命に大小を考える必要はないと思う。大人であろうが、子どもであろうが、生命は生命。同じように生まれ、同じように消えていくものだから。新しい生命が一番大きな可能性を持っているから、大切なんだと思う。だから僕は「ここにも同じ生命が生まれている」ということを訴えたい。それを補助できるような現状の紹介、例えば生まれてくる赤ちゃんは障害を背負っている可能性がある。それでも可能性がある限り守っていってあげたいというような。

同じ生命だということに目を向けることが大事だと思う。日本に生まれたもの、砂漠にうまれたもの、戦災の中にうまれたもの、すべての生命の等しい可能性を主張していかねばならない。

坂口 薫

「チェルノブイリ」という言葉は、今までに耳にしたことがあったが、単に大きな原発事故という程度の認識しかなかった。私が印象に残っているのは〝豊かさとは何だろうか？〟と先生がおっしゃった言葉である。日本では物は豊富にあるけれど、どこか心が空しい…誰しもが感じているように思う。ベラルーシでは何十年と使われているものが、日本ではすぐに新しいものと交換され、不必要なものとなる。改めて考えさせられた。〝一粒の子どもの涙は全人類の悲しみより重い〟この言葉も印象に残っている。

ベラルーシと日本との医療が大きく違うことを知った。日本は医療が進んでいると言われているが、私はあまり実感することがなかった。日本での医療がベラルーシでは、使えない…そんな現実があるのだと初めて知った。支援というと、どこか一方的になってしまうところがあるのだと思った。

汚染された土地であっても、五感では何も感じないため、住み慣れた土地に住み続ける人がいた。私はその人々の話や写真を見て「生」というものの力強さとたくましさを感じた。

市川 直

福島県郡山市にある県立あさか開成高校の国際理解講座でチェルノブイリの話をした。単位制のユニークな高校で、「生徒の目が輝いている　生徒の明るい笑顔が見られる　生徒の元気な声が聞こえる」学校作りをめざす校長先生をはじめとして、先生方も明るくすがすがしい学校との印象を受けた。

一週間前から廊下に写真パネルを展示し、事前学習をしてくれた。体育館で話を聞いてくれた生徒達の息使いが静かに緊張し、チェルノブイリに注目してくれている事が伝わってきた。後日、堀川校長から、うれしいお手紙をいただき、若い世代にチェルノブイリを伝え、私たちの活動を伝えていく意味を再認識した。

あさか開成高校

「講演会ありがとうございました。（略）チェルノブイリの現状、みる、聞くことが大切と思いました。意見を発表した生徒は充分に学びの展開を心得て、自分を高める心がありますが、そうでない生徒も少なからず心が動いたようです。講演の翌日、パネルの前に立ち止まる生徒がおりました。将来の行き方のきっかけになったものと思います。良い機会となった本校の国際理解講座、来年も新たな取り組みをしていきます。

今日も心の扉を開きたい生徒が校長室に来ました。じっくり聞いてやると安心して帰ります。『教育は遠道ほど効果あり』こう心がけて、大人の目線から生徒の目線で「待つ」活動を続けます。先生の活動も長く、そしてチェルノブイリのこどもはもちろん、私たちの国の若者に元気や生き方を示すこと期待しています。郡山の地から応援しています。」

（校長・堀川 肇子）

◎初めて募金してから6年たちました。細々とした金額ですが、子どもたちに役立ちますように…。（神奈川県）

◎一人でも多くの子供達を救うために、これからも、がんばって下さい。ささやかな協力しかできなくて、申し訳ありません。（長野県）

◎ＪＣＦの活動のために贈ります。（長野県）

◎「アレクセイと泉」金沢での上映良かったです。これからも長い活動期待します。（石川県）

◎私にはできないことをして下さっている皆様にお礼申します。（神奈川県）

◎ほんの少しですがお役に立てられればと思います。（神奈川県）

◎少しで悪いと思いますが年金ぐらし中、ほそ々長々と思っています。（愛知県）

◎どこでもよろしいです。（山梨県）

◎寄付をすることでしか、かかわれませんが、頑張って下さい。（東京都）

◎わずかで申し訳なく存じます。「放射線災害…」の神谷さんのリポート、出色です。（長野県）

◎いつも少額で申し訳ありません。（大阪府）

◎私は盆と正月に少しカンパをしているだけです。小遣いの中から役に立ってほしいと思いカンパしているだけです。子ども達の顔を見るにつけ原発の怖ろしさを身にしみて感じるだけです。もちろん狭い日本ですから、日本にある原発で事故があれば…それを思うだけで安々と眠れません。同じ運命にあるのだからと思ってみても…できるなら風力、太陽、そうしたものにエネルギーを見いだしてほしいものです。（広島県）

◎少しばかりですが。（長野県）

◎頑張って下さい。（岡山県）

◎世界の平和とお働きが恵まれますように。（北海道）

◎子供たちに。愛をこめて。（東京都）

◎私たち年金収入だけで暮らす者にとっては、医療制度の改悪で重い疾病に罹ったらひとたまりもなく今の生活は崩壊するな、という恐れを持ちつつ生きる毎日です。ひっそりと人に迷惑をかけずに生きることすらできなくなるそうです。全く恐ろしい世の中ですね。今年も賛助会費ですみません。お送りします。（栃木県）

◎少額でごめんなさい。長く続けるためには、今の私にはこの額がちょうどいいのです。でも、いつか宝くじが当たったら、ドーンとね！宝くじなんて買ったことのない私の妄想です。（長野県）

◎少額ですがどちらかに役立てて下さい。（京都府）

◎水俣病の胎児、サリドマイドの胎児だった方、一番弱いお腹の中の赤ちゃんが一番の影響を受けます。せつないです。（東京都）

◎少額ですが、ご利用下さい。（長野県）

◎いつも「グランドゼロ」ありがとう。5歳、2歳になる孫男の子がいます。次の時代に生きるこどもたちに、少しでもきれいな地球を。ガンバロー!!（京都府）

◎会費まだのようでしたら、会費として、残金を支援に。（千葉県）

◎皆さんのお気持ちが伝わってきます。私からもありがとうございます。（石川県）

◎90歳主婦のささやかな募金をお送りします。よろしく。（東京都）

◎写真の中で仲間に支えられ、手をふっているタチヤーナ・シュミヒナ先生、その笑顔を見てうれしかった。祈ってます。（神奈川県）

◎最も必要な項目に振り込んでください。（東京都）

◎「宗男効果」にはたいへんむかつきました。ささやかですがちょっとはやいクリスマスカンパです。（兵庫県）

◎よろしくお願いします。（大阪府）

◎年金生活です。僅かですが、お役に立ててください。（宮城県）
◎今必要としている所に使って下さい。皆様のご活躍心から応援しています。（長野県）
◎地球に宇宙に平和の希望の来る日を待って。（長野県）
◎神谷さん、いつも、ご活躍応援しています。（神奈川県）
◎いつもお世話になり、ありがとうございます。（愛知県）
◎細く長き活動の継続をきたいしております。（徳島県）
◎一年間いや二年間、全く忘れていました。すみません。（東京都）
◎『グランドゼロ』に振込先や番号があればありがたいです。（大阪府）
貴重な御意見をありがとうございます。今号から「ありがとうございます」のページに振込先情報を掲載します。（事務局）
◎子ども達によるクリスマス献金です。（京都府）
◎「アレクセイと泉」笠間上映会で集まったカンパです。子供たちに役立てて下さい。（茨城県）
◎貧者の一燈です。ベラルーシの子どもたちへ。白血病の子どもたちにお使いください。（長野県）
◎多難な一年が暮れようとしています。せめてささやかな志を抱き続けられますように。（長野県）
◎クリスマスおめでとうございます。学者達はその星を見て喜びにあふれた。小さな生命の上に又世界の苦しみの中にある方の上にそのよろこびが満ちあふれ出すようにいのりつつ。（埼玉県）
◎被災地の子供たちはよいお年を迎えられますように。（宮城県）
◎クリスマス献金として（大阪友の会クリスマス祝会献金より）（大阪府）
◎今年もエア・メイルが届きました。気持ちが伝わってきます。こみあげてくるものがあります。（長野県）

◎今日Xmasカードが届きました。ありがとうございました。よろしくお伝え下さい。少ない金額を思い出したように送ってすみません。一番必要なところにお使いいただければうれしいです。（石川県）
◎黒パン、いつか買いに行きたいと思っています。（神奈川県）
◎生まれてきた子供達と家族が幸せでありますように。（東京都）
◎尊い生命を大切に。（福岡県）
◎少なくてすみません。（山梨県）
◎お役立て下さい。（広島県）
◎コース選択も会費もお任せします。少額でございます。チェルノブイリの成長者は親にならない覚悟も持ってほしい。生まれた子を誰が守れるのか…。（長野県）
◎わずかですが、お役立て下さい。クリスマスカードありがとうございます。心温まる思いがします。早く元気になって下さい。（京都府）
◎少しばかりですがボーナスをいただきましたので送らせていただきます。（千葉県）
◎前回も僅かしか送金していませんのに「グランドゼロ」お送りいただき読ませていただいています。今日ベラルーシから緑と赤の国旗の絵のクリスマスカードが届きました。街中のイルミネーションよりずっとあたたかで、胸がいっぱいになりました。来年はこちらから送らせて下さい。（先日本橋監督とお話できてうれしかったです。）（京都府）
◎雑木林のパンやさんおいしいパンを一年ありがとうございました。食器戸棚ありがとうございました。（石川県）
◎私の疑問にさっそく答えていただいてありがとうございました。助けをまっている人は世界中に大勢いるようです。私はどうしたらいいのか。（神奈川県）
◎役立てて下さい。（東京都）

◎はがきありがとうございました。
（愛知県）
◎クリスマスカードをありがとうございました。（思ってもいませんでしたので…）化学療法を受けた娘、無事二度目のクリスマスを迎えました。気持ちです。ほんの少額ですが、よろしくお願いします。
（宮崎県）
◎グランドゼロいつも送って下さりありがとうございます。皆様の継続する熱意に頭がさがります。小さな命のためにこれからも頑張って下さい。
（長野県）
◎半分は母からです。少額ですが、お役立て下さい。
（千葉県）
◎僅かながらお役にお立て下さい。
（愛知県）
◎今年50回目の渡航をしました。寒い季節、子どもたちはどうしているだろうか。
（青森県）
◎上記必要なところにお使い下さい。
（神奈川県）
◎クリスマスカードが届きました。みんなの大切な命が輝き続けますように。
（埼玉県）
◎未来につながる、ひきつぐ命、がんばれマリアちゃん!!クリスマスカードありがとう。サンタさん来ましたか？
（神奈川県）
◎昨年、大宮で（映画を）見ました。又東中野へ友達を連れて行きます。
（埼玉県）
◎ささやかですが、核の恐怖を忘れないために…。
（長野県）
◎本年もどうぞよろしくお願いいたします。皆さんお元気ですか。（茨城県）
◎娘が血液疾患ですが、幸い小児慢性疾患認定をうけております。免除される治療費をわずかですが、寄付させて頂きたいと思っています。
（千葉県）
◎昨年の活動に感激しました。今年は一緒に行動できたらいいなと思っています。
（長野県）

◎クリスマスカードを頂戴しました。有り難うございます。些少ですが、今一番必要なところにお納め下さい。
（大阪府）
◎クリスマスカードをありがとうございました。少しですが送ります。子どもたちの笑顔が増えますように。
（石川県）
◎私達の店は〝うなぎ屋〟で元気をお届けする商売です。少しでも世の中の子ども達が〝元気〟になれますように事務局の皆様方頑張って下さい。ささやかな応援ですがよろしく。（長野県）
◎一足早くクリスマスカードを頂きました。ありがとうございました。みなさんの活動を応援しています。少しですが、役立てて下さい。
（茨城県）
◎昨年末はステキなクリスマスカードありがとうございました。子どもたちの尊いいのち、そして笑顔のために、少しですが、お役立て下さい。
（神奈川県）
◎小さな命が、一人でも多く救われますように。クリスマスイブにクリスマスカードが届きました。有り難うございました。
（長野県）
◎12月9日、甥夫婦に第2子が生まれました。世界のどこに在ってもすこやかに育ついのちであるようにと、ささやかな祈りを捧げずには居られません。
（長野県）

チェルノブイリ 10 ドリームズ 8

日本からベラルーシへ骨髄を送ります。
マリアちゃん骨髄移植をご支援ください。

マリア・クリスタポービッチは歌ったり、踊ったりするのが大好きな５歳の女の子。お見舞いの人が来るたび大喜びする、ちょっと寂しがり屋さんです。日本チェルノブイリ連帯基金が支援している、ベラルーシ小児血液がんセンター（ミンスク市）に入院中で、病名は「ファンコニー貧血」。先天性の不良性貧血で、このままだと白血病に移行し、また他のガン発生のリスクも大きいことから、骨髄移植治療を受けなければ、あと数年しか生きられないだろうといわれています。骨髄バンクによると、マリアちゃんとの適合者は主に日本にいます。（日本に 20 人、他アメリカに１人、台湾に３人）。2003 年中に日本から骨髄採取し、現地へ届け、移植治療の実現を目指しています。

どうか、マリアちゃん骨髄移植へのご支援をよろしくお願い致します。
また、引き続き、白血病の治療支援を続けていきます。こちらもよろしくお願い致します。

◎チェルノブイリ 10 ドリームズ 8	
Ⅰコース　マリアちゃん骨髄移植支援	
Ⅱコース　小児白血病支援	
郵便振替口座番号	**00570-6-34568**
加入者名	**チェルノブイリ（10）ドリーム 8**

ＪＣＦ会員会費	賛助会費	5,000 円
	特別賛助会費	30,000 円
	事務局ガンバレ会費	10,000 円
	郵便振替口座番号	**00560-5-43020**
	加入者名	**日本チェルノブイリ連帯基金**

会員さんを訪ねて

フストレーチャ：出会い

ВСТРЕЧА

帆布鞄の「家業」を守って…

私は京都を歩くのが好きです。京都には神社仏閣だけでなく、小さなお店にまでオリジナルにだけ許された自信と自負と大胆さがあります。どんな奇抜な試みも、元祖がやれば、恐くない…。京都には、その空間に身を任せると安心して漂っていられるおおらかさと、受け入れたふりをしながら闖入者を翻弄するしたたかさがあります。だからつかの間の都との逢瀬で、京都の端っこを掴んだつもりでも、田舎に帰ってきて手を開くと、掴んだつもりの何かがさらさらと指から抜け落ちて、懐かしさだけが残り、掴みきれないもどかしさにかられ、ああ、また行きたいなと、思うのです。

そんな片思いの京都に和製ルイ・ヴィトンとでもいうような、観光客がお店の前に列をなし、連休の時など午前中にはお店の品物が完売してしまう鞄屋さんがあります。「一澤帆布」という墨字のタグが印象的な、手作りの帆布製の鞄を作っている一澤帆布さん、この一澤さんは私がＪＣＦに関るより前からＪＣＦの会員さんで、かつてＪＣＦがチャリティーオークションをした時にはバッグを提供して下さったこともあるそうです。ＪＣＦの関係者にも一澤さんのバッグの愛好者が多く、私も一度お話をお聞きしたいと思っていたので、昨年の秋に所用で京都に出掛けた時にお願いして、お店にお邪魔しました。

この日もお店は満員の盛況、お客様をかき分けて、二階事務所への階段を登ります。

奥様の恵美さんと二人で迎えて下さった一澤信三郎さんはにこにこと、「今日は難しい話ですか？難しい話はこっちへしてな」と奥様を指されます。

「ＪＣＦを応援するきっかけですか、そやなぁ～、写真家の本橋成一さんが、父の代から三十年来のうちの鞄の愛好家で、取材に行くのにうちの鞄を愛用してもらっていたのが、まぁきっかけかなぁ～。応援なんてそんな大したことはしてないし、たよりないもんなぁ～、うちはなぁ～」と、京言葉の一澤節に引き込まれて、お話が始まります。

明治三十年創業で、信三郎さんは四代目、昭和三、四十年代には山用品を多く作っていて、登山家は一澤さんの道具を持っていると一流と言われたそうです。

—今は大した装備せずに誰でも登るようになって、装備にもこだわりをもたない人が増えて、化学繊維の山用品が幅を利かせるようになった。でも男性の服装も、うちのバッグが似合うような、ラフなスタイルが一般的になった時代背景もあって、昔から宣伝したことはないのに、おかげさんで帆布という素材を見直してもらって、帆布鞄の愛好者が年々増えている。対面直売、作ったところで売っている。—

「ラーメン屋さんといっしょや。（と笑えるのは、老舗の自信でしょう）」

このお客さんの反応を直接感じながら製品を作る『対面販売』を大切にするため、お店の近所にある作業場のスタッフも、出勤時か退社時に必ずお店に顔を出すことになっているそうです。自分の作った鞄へのお客さんの反応をジカに感じることが、もの作りにも大切だといいます。

—うちは『うまく高度成長に乗り遅れ』てよそさんが店舗展開で多角化していった時に、昔ながらのスタイルを変えなかった。東京や各地のデパートに出すこともしなかったから、流通経費も宣伝費もいらない。作る人は全員社員で下請けはない。以前、自宅で縫製の一部をパートでやらせて下さいという依頼があって、試してみたこともあったけれども、一個いくらという請け仕事は、効率重視になり、ひと手間

特注の帆布の説明をする一澤恵美さん

木の株の台の上で折り代を小槌で始末する作業

仕事場は若い職人さんが多い

を惜しんでしまうので、一澤の規格に合わなくなって中止しました。パートで人を安く使うのではなく、長く居ついてもらって、だんだん技術を覚えていって欲しい。それなりの対応をしないと、人は育たない―

と含蓄のある言葉が続きます。

この時「ちょっと仕上がりを見て下さい」と漆黒の帆布で作られた、大きな桶のようなバッグと、釣り竿でも入りそうな長い袋が持ち込まれました。

何でも巷で話題の和泉元彌さんの奥さんが昔からのお客様で、今回、元彌さんが地方巡業の時に持ち運ぶ太鼓や鼓や竿を入れる袋の特注があって、その製作中のチェックだったのです。美しい黒い帆布の袋は能狂言の舞台に置いてもぴったりと思う美しさです。

「元彌さんは意外に小柄な人だけど、こんな大きいもん持てるんかいなぁ」

「ああいう方は付き人が持つんですよ」

と奥様が笑います。

ノーベル賞を受賞した田中浩一さんに京都府が遅ればせながら特別栄誉賞を授与し、その副賞に一澤さんの地質調査用バッグ（小物入れポケットがたくさんついたショルダーバッグ）が選ばれたそうです。田中さんには背広と皮のバッグより、作業着に一澤さんの地質調査用バッグがぴったりで、京都府もなかなか味なことをします。

一澤さんはＪＣＦの関係者にも詳しくて、「鎌田理事長は『がんばらない』とか言ってるくせに『一澤さんは、ちょっとくらいがんばって下さい』と言われた」とか、楽しいお話はつきることがありません。

お店の近くの仕事場にも案内していただきました。老若男女六十五人程の職人さん達はそれぞれチームに分かれて、違うバッグに取り組み、チーム内で分担を決めてバッグを作り上げていきます。（全体から切り離されて同じ作業をくり返す流れ作業とは全く違う、チーム分業でした）原料や染めも一澤さんのバッグ用に指定して生産してもらっているので、一澤さんである程度の発注をしないと、帆布の生産自体が途絶えてしまう危険もあるとか。工場は職人さん達の熱気と帆布独特の匂いが立ちこめています。バッグの型に合わせてはさみで一つ一つ帆布を切ったり、小さな竹箒で、絶ち切りの

糸くずをとったり、鞄の折りしろを切り株の台の上で小槌でたたいて折り返していく、気の遠くなるような作業は、見飽きない手仕事の魅力です。

職人さんの中には、大学院で社会学を学び、学者になるか鞄職人になるか迷って、結局職人の道を選び、帆布に触れている時が至福の時だと言う若者、昼間は職人さん、夜は劇団で活躍している人もいるとか。

最後に「一澤さんのこれからの夢は？」お聞きしたら、「その件なら担当者に替わります…」とおっしゃいます。いや、困った、新製品開発担当さんとかが現れたらどうしよう、と思っていたら、笑いながらやって来たのは、途中で席を外された奥様でした。

「うちは他所に店を出さない主義なので、他所の場所に住めません。それに人任せにしないで、製品へのクレームからなにから私達がみんな知っていて、お客様にずーっと使っていただける物を作っていきたいと思ってます。企業でなくて家業なんですよ。作り手の顔が見えにくい時代だから、せめてオーナーの顔は見える店でありたい。そういうことがわかってくれる跡継ぎが、このお店をやってくれるようになったら、ロンドンのどこか小さな街に住んで、ひっそりとした場所に、お店を出したい、それが夢です。

自社の鞄を持ってポーズして下さった一澤信三郎さん

前にロンドンの「エッグ」というお店の日本人スタッフから手紙が来て、鞄の見本を送って欲しいというので、一つバッグを送ったけれど、なしのつぶてだったの。たまたまロンドンに行った時にそのお店を訪ねたら、二階の扉にうちのバッグがちゃんと飾られていました。裏町の小さなお店で、でもとっても不思議な雰囲気のあるお店でした。ロンドンはとても住みやすそう。歩いて廻れて、目まぐるしくなくて、こんなところにお店を開けたらなぁ～と思って…。でもロンドンに住んだら、気まぐれにしか開けないお店になってしまうかもしれないわねぇ」

夢担当の奥様の柔らかな声を聞いていると、私まで霧のロンドンの裏町をさまよって、小さなお店のウィンドウに一澤さんの帆布のバッグを見付けるシーンに誘い込まれてしまいました。

いつか夢がかないますように！

誌面に紹介できないほど沢山のお話しを、ありがとうございました。

（事務局・布山）

萬粗忽堂本舗

よろずそこつどうほんぽ

店主　村石　保

その五

偏愛のココロ②【ジッポー（Zippo）前編】

ビートルズのアルバム「アビイ・ロード」のジャケット写真が、禁煙運動団体の圧力で変造させられたという報道があった。ジャケットの中の、裸足で歩くポール・マッカートニーの煙草を、米国のポスター会社（オイオイまたぞろ米国か？）がコンピュータ処理して消したものを売り始めたというのである。何でも「ファンが真似ると良くない」と禁煙派（ホーラ、出たよ出たよ正義の禁煙・嫌煙派！）が圧力をかけたということだ。

こういうヨタ記事を読むと、タバコでも吸って荒ぶる気持ちを鎮めるのが一番である。にしてもアメリカはとうとうここまできたか。この国は紛れもなく、そして確実にファシズムへの道を邁進している。癌になった喫煙者が煙草会社を訴えて、とてつもない賠償金をせしめる国であるからして、さもありなん。「ファンがまねると良くない」だってさ。それが、ポスターの写真を変造する理由であったとしたら、もはや救いようがないオチャラカ話である。で、癌になったら、今度はポール・マッカートニーでも訴えるかね。だいたい自分の息子が太ったのはハンバーガーの食い過ぎが原因だとママがハンバーガー会社を訴えちゃうお国柄なんだもの。でもなあ、愛煙家をパージする前に、あんたんとこの戦争中毒者たちを何とかしたらどうだい。かなり危ないゼ（追従するニッポンはそれ以下ってか）。

前説が長くなった。かく言う私メ、煙草を吸わなくなって二か月以上になる。思い起こせば中学卒業の春以来、三十五年以上にわたって愛煙してきた煙草を、ある日を境に、突如と吸わなくなっていた。決して煙草税が上がるなどというセコイ理由で禁煙をするほどヤワな愛煙家ではない（つもりだった）し、我が辞書に「禁煙」なる文字は載っていない。ましてや健康のために禁煙するなどという殊勝な心懸けなんて、ついぞ持ち合わせたこともない。ということで、私は正真正銘、自他共に認めるところの筋金入りヘビースモーカー（の筈）だった。

新聞のコラムに、民俗学者の赤坂憲雄の禁煙における苦労話が載っていて、文字通り我が事のように身につまされた。というのも、氏が禁煙で一番苦労したのが、原稿が書けなくなったこと。私にもっとも顕著な症状がこれなのだ。他にはさほどの苦労も禁煙ガムのお世話にもなっていない。だいたい吸いたいとも思わないのだから、人間って奴はほんとうに不思議だ。ただ、原稿が書けない……のだ。私にとって、原稿書きにおける煙草とコーヒーとワープロは、三位一体のごとく分かち難く、かつ神聖にして犯すべからざる関係なのだ。だから禁煙なんかするとたちまち天罰が降って、途端に持続力と集中力が著しく減退するのである。赤坂氏によると、体内に溜まったニコチンを追いだすのに半年かかったという。それからようやく原稿が書けるようになったとか。いやはやこんな状態が半年も続くのか（本来なら、この辺で一服して思案するのだが）……。

下手な言い訳をしているうちに紙数が尽きた。今号では、喫煙には欠かせないジッポー（Zippo）を書くつもりでいたのだが、つい三十余年に至る我が偏愛のココロの内を披瀝してしまった。次号はジッポーの後編（MADE IN U.S.A）のココロなのだ。

［追記］

読者諸姉諸兄、並びに友人・知人の皆さんへ。

私は決して「禁煙」宣言をしたのではない。切らした煙草を買いにいく途上にあると理解していただければ幸いである。ただ、くだんのタバコ屋がやたらと遠いのである……。

ニュースクリップ

＜国　内＞

●東電が虚偽報告

東京電力が福島第二原発３号機での機器補修で国の検査官にうそをつき、メーカーには虚偽の報告書を書くよう指示していたことが、経済産業省原子力安全・保安院に提出された総点検の中間報告で明らかになった。（11 月 15 日）

●美浜原発で冷却水漏れ

関西電力美浜原発３号機で、原子炉補助建屋の配管のバルブ付近から放射能を含んだ１次冷却水が漏れ、原子炉を手動停止した。（11 月 15 日）

●福島第一原発、新たにひび

東京電力福島第一原発３号機の制御棒駆動系配管で、新たに配管を貫通するひびが見つかり、同原発４号機でも、格納容器外側の同系統配管で多数のひびが見つかった。（11 月 22 日）

●ウラン濃縮工場で作動トラブル

青森県六ヶ所村にある日本原燃ウラン濃縮工場で、六フッ化ウランの濃度を均等にする槽（均等槽）で熱水停止装置が作動するトラブルがあった。今回のトラブルは 92 年の工場操業以来初めて。（11 月 25 日）

●東電、原発検査元請けに見返り金

東京電力が、原発の定期検査を請け負った企業に、検査期間短縮の見返り金を払ってきたことが、衆院経済産業委員会で明らかになった。97 年４月から始め、総額は 37 億円余という。（11 月 27 日）

●保安院、日立を厳重注意

東京電力福島第一原発１号機の気密試験データ偽装工作問題で、経済産業省原子力安全・保安院は、検査を請け負った日立製作所を厳重注意する方針を決めた。（11 月 29 日）

●福島第一１号機、１年間運転停止処分

経済産業省原子力安全・保安院は、原子炉等規制法に基づいて東京電力福島第一原発１号機を１年間の運転停止処分にした。（11 月 29 日）

●福島第一１号機、気密試験を実施

東京電力は、経済産業省原子力安全・保安院の立ち会いのもとで福島第一原発１号機の気密試験を実施、格納容器の健全性を確認したと発表した。（12 月５日）

●原研試験炉冷却水漏れ

日本原子力研究所大洗研究所の材料試験炉（ＪＭＴＲ）で、冷却水を送るポンプ付近から水漏れが見つかったため、原子炉を手動停止した。（12 月 10 日）

●東電、全原発 17 基一時停止も

東京電力福島第一原発１号機の気密試験偽装問題で、ほかの原発の安全性をチェックするため、東電は運転中の原発を止め、春にも気密試験をする意向で、一時的に東電の全原発 17 基が春、停止する可能性が出てきた。（12 月 11 日）

●東電不正、市民らが告発

東京電力による一連の原発の不正で、当時の発電所長や検査を請け負った日立製作所の現場責任者らを刑事告発するために結成された市民グループ「東電の原発不正事件を告発する会」が、東京、福島、新潟の３地方検察庁に告発状を提出した。（12 月 12 日）

●もんじゅ改造「妥当」と答申

高速増殖原型炉「もんじゅ」の改造工事について、国の原子力安全委員会は、核燃料サイクル開発機構の工事計画は「妥当」と、平沼経済産業相に答申した。同省は文部科学省の同意を得て計画を許可する予定。（12 月 12 日）

●敦賀原発でボヤ、原子炉緊急停止

日本原子力発電敦賀原発２号機のタービン建屋内で、高圧タービンを包む保温材から発火。作業中の社員が消火したが、まもなく再発火したため、原子炉を手動で緊急停止した。（12 月 12 日）

●放射性廃棄物最終処分場を公募

原発から出る高レベル放射性廃棄物の最終処分について、事業主体の非営利法人「原子力発電環境整備機構」は、処分場の公募を始めると発表した。対象は全市区町村。（12 月 19 日）

●「ふげん」3 月 29 日に運転終了

核燃料サイクル開発機構は、新型転換炉「ふげん」の運転を３月 29 日で終了すると発表した。運転終了後約 10 年で廃炉に向けた準備を進めた後、解体撤去や廃棄物の処理処分に入ることになる。（1 月 6 日）

＜朝日新聞＞から

●福島第二原発「ひび」新たに確認

東京電力は、再点検していた福島第二原発のシュラウドについて、３号機で９カ所、４号機で７カ所のひびを新たに確認したと発表した。（1 月 16 日）

●ひび割れ運転を承認

原発のトラブル隠しで停止している原子炉について、総合資源エネルギー調査会の健全性評価委員会は、経済産業省原子力安全・保安院から評価報告を受けた。東京電力柏崎刈羽３号機と、中部電力浜岡４号機は、シュラウドのひび割れを補修しなくても５年間は運転を認めるという保安院の判断を承認した。（1 月 21 日）

●核燃機構、点検判定ミス 72 件

核燃料サイクル開発機構は、過去 10 年間の自主点検記録を調べ直した結果を、経済産業省原子力安全・保安院に報告した。「もんじゅ」や「ふげん」、東海再処理工場の点検で、計 72 件の合否判定ミスがあったが、いずれも軽微なものだったとしている。（1 月 23 日）

●「もんじゅ」設置許可無効

95 年 12 月のナトリウム漏れ事故後、停止中の高速増殖原型炉「もんじゅ」をめぐり、住民 32 人が国を相手に原子炉設置許可処分の無効確認を求めた行政訴訟の控訴審で、名古屋高裁金沢支部は、請求を棄却した一審の福井地裁判決を取り消し、許可処分を無効とする判決を言い渡した。（1 月 27 日）

●政府、上告申し立て

政府は、高速増殖原型炉「もんじゅ」の設置許可処分を無効とした名古屋高裁金沢支部の判決を不服として最高裁に上告の受理申し立てをした。（1 月 31 日）

＜海　外＞

●ＥＵ、ベラルーシ大統領の入国を禁止

欧州連合（ＥＵ）外相理事会は、野党政治家やジャーナリストの抑圧など政権による人権侵害が深刻化しているとして、ベラルーシのルカシェンコ大統領と７人の閣僚を入国禁止とする制裁を、ポルトガルを除く加盟 14 カ国で実施することを決めた。（11 月 19 日）

●ベラルーシ・ロシア統合歩み寄り

ルカシェンコ・ベラルーシ大統領が、ロシアのプーチン大統領と会談し、両国の統合推進で一致した。連邦最高評議会の開催や連邦憲法作成の促進であっさり合意した。欧州の孤立策に追われた同大統領が関係修復を急いだ可能性が指摘されている。（11 月 27 日）

●米大統領「核で報復」警告

ブッシュ米大統領は、生物・化学兵器による攻撃を受けた場合に、核兵器を含む圧倒的軍事力で報復する権利を想定した「大量破壊兵器に対する国家戦略」を発表した。（12 月 11 日）

●北朝鮮「核施設再び稼働」

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の外務省スポークスマンは、米国が重油の供給を中断したことを非難するとともに、94 年の「米朝枠組み合意」以来凍結していた核施設について「稼働と建設を即時再開する」と表明した。（12 月 12 日）

●ＩＡＥＡ、対北朝鮮決議案

国際原子力機関（ＩＡＥＡ）は緊急理事会を開き、北朝鮮に核施設の再凍結と核兵器開発の放棄を求める決議を採択した。（1 月 6 日）

●北朝鮮、ＮＰＴ脱退宣言

北朝鮮は、核不拡散条約（ＮＰＴ）を脱退し、ＩＡＥＡとの保障措置（核査察）協定の拘束から完全に脱することを宣言する声明を発表した。（1 月 10 日）

●イラク査察延長要請へ

ＩＡＥＡのエルバラダイ事務局長はモスクワで記者会見し、イラクでの大量破壊兵器査察について、国連安保理に対して査察活動を延長するよう求める考えを明らかにした。（1 月 16 日）

●ベルギー、原発全廃法が成立

ベルギー上院は、運転中の原発７基を 2025 年までに全廃する法案を賛成多数で可決、成立させた。使用期限を迎える 15 年ごろから順次、運転を停止、解体する方針だ。（1 月 16 日）

Здравствуйте!

日本で暮らして驚くこと

タスマガンベトフ・ガニ

私は、日本に来たのは、２０００年２月22日でした。母国のカザフスタンではたくさんの雪が積っていたけど、東京は全然雪が無かったです。日本に来る前に日本語が話せなかったので、一年間東京の日本語学校で日本語を学びました。その日本語学校で初めて色々な国の人々と出会ったのです。カザフスタンにも色々な人種の人がいるけど、ほとんど皆カザフスタン人なので、考え方や習慣や生活スタイルが大体同じです。しかし、日本で私とまったく違う人々と出会うことができました。そして、自分とは違う人と交流するのがとても面白いことだと分かりました。

日本語学校を卒業して、信州大学に入学して、今は二年生です。二年からインドネシアとベトナムの友達と一緒に住むことにしました。一緒に住むことによって、インドネシアやベトナムについてたくさんのことを知りました。例えば、インドネシアは何千個の島があって、世界で島の数が一番多い国だということを知りませんでした。そして、カザフスタンでは、あまりバイクに乗る人がいないけど、ベトナムではほとんどの人がバイクに乗っているそうです。私たち三人で日本と母国で何が違うかという事について話すことが多いです。例えば、ベトナムの友達がこういうことを言い出した「日本の芸能人は素晴らしいと思うよ、どんなに有名でも皆と一緒に番組に出て、話したりする。ベトナムの芸能人は手の届かない存在なのだ」。私は、日本の老人達はいくら年とっても自分で歩いたりしたり、いつも元気そうに頑張っているなと思います。ある日、私は歩いているとき、後ろから80代のおばあさんに走り抜かれたのです。ショックでした。

日本は平和、治安がとてもいいなどのうらやましいところが多いです。しかし、日本には外国人の目から見ると、変なことも少なくないです。代表的な例は女子高生のスカートです。最初に、女子高生は短いスカートを着るように強制されていると思っていて、冬は寒くて、かわいそうだと思っていました。しかし、後でそれは、彼女達が自分で長いスカートを短くしていると知って、びっくりしました。

このように、人々の違い、国と国の違いを見つけるのが癖になりました。別に、どちらがいいかどちらが悪いかという問題じゃなくて、ただ価値観や考え方が違うからなのだと思います。とにかく、違うというのは面白いです。

こんにちは！

ガニ君と学ぼう……

ロシア語講座
第二期受講者募集中！！

開講日　：４月５日（土）午後１時
場所　　：ＪＣＦ事務局

Ａコース：初級入門コース
Ｂコース：初級会話コース

詳細は事務局までお問い合わせ下さい

こんにちは！

Здравствуйте!

「イラクの小さな橋を渡って」
池澤夏樹・本橋成一

ＪＣＦ理事の写真家・本橋成一さんと作家・池澤夏樹さんが 2002 年 10 月末から 11 月にかけてイラクを取材した記事が本になりました。

［本文より］
イラク人の誇りにはいくつかの理由があるが、世界で最も古い文明を創造したというのもその一つだ。たかだか二百年あまりの歴史しかない某国が何をいばるかと笑う。

バグダッドで、モスルで、また名を聞きそびれた小さな村で、人々の暮らしを見た。ものを食べ、互いに親しげに語り、赤ん坊をあやす人の姿を見た。わいわい騒ぎながら走り回る子供たちを見た。そして、この子らをアメリカの爆弾が殺す理由は何もないと考えた。

文・池澤夏樹
写真・本橋成一
発行・光文社
定価・952 円＋税

［あとがきより］
早い話が戦争とは人が意味もなくたくさん死ぬことだ。だから外交努力で回避できるかぎり回避しなければならない。（中略）この戦争を止められなかったら、次の戦争も止められないだろう。国際政治を動かすのは議論ではなく武力ばかりになるだろう。（中略）世界中どこでも人がすることに変わりはない。自分と家族と隣人たちが安楽に暮らせるように地道に努力すること。それ以外に何があるか。まだ戦争は回避できるとぼくは思っている。（池澤夏樹）

「信州イチ押し温泉紀行」
一柳雅彦

「グランドゼロ」の題字・イラストでおなじみの貝原浩さんが装幀・イラストを担当している「究極の温泉本」!?

［表紙より］
毎週３泊４日のハードな日程ときつ～いノルマ、微々たる経費。そんな三重苦にもメゲず、夢の出張生活を手に入れた。哀愁のサラリーマン。いま初めて明かされる怒濤の温泉めぐりとは？知られたくない、教えたくない、とっておきの隠れ湯から、秘湯、珍湯まで一挙公開。営業がてらの温泉か？はたまた温泉がてらの営業か？出張サラリーマン、またの名を「孤高のラーメニスト」！食べ歩くこと 26 年、通算 6000 杯以上を、すすり続けたオトコが、湯めぐりついでに食い倒した信州のラーメン、そば.....にうまいものの数々！伝説のラーメニストがイチ押しの温泉と旨い店を大公開？

著者・一柳雅彦
装幀、イラスト・貝原浩
発行・オフィスエム
定価・1600 円＋税

Book

検証 東電原発トラブル隠し
原子力資料情報室

昨年発覚した東京電力などによる一連の「原発トラブル隠し」の真相に迫るレポート。原子力関連のお役所と電力会社、企業の隠蔽体質、馴れあい体質、無責任さを批判。老朽化が進む原発の安全性の問題点を指摘。これからの新しいエネルギーのありかたも提言している。

岩波ブックレット No.582
「検証 東電原発トラブル隠し」
著者・原子力資料情報室
発行・岩波書店
定価・480 円＋税

Book

非常事態のイラクを行く
本多勝一

02年4月から5月にかけてイラクを取材したレポート。91年のイラク戦争（いわゆる湾岸戦争）のときに使用された劣化ウラン弾が原因と思われる白血病の子どもたちが増えているが、経済封鎖で必要な医薬品や医療機器が手に入らない。また、新生児の奇形や異常も増えている。戦場に残されている破壊された戦車などからは今も放射能が検出されている。

貧困なる精神Q集
「非常事態のイラクを行く」
著者・本多勝一
発行・朝日新聞社
定価・1100 円＋税

Book

新しい歴史狂科書
マッド★アマノ with 新しい狂科書、作るかい？

写真週刊誌『FOCUS』に81年から01年まで連載された「狂告の時代」が本になった。歴代の総理大臣をはじめ、世間を騒がせた政治家、芸能人、有名人をパロディにして笑い飛ばす。声に出して読みたい「狂科書」だ。

「新しい歴史狂科書」
著者・マッド★アマノ with 新しい狂科書、作るかい？
発行・新潮社
定価・1300 円＋税

Book

スロー・イズ・ビューティフル
辻 信一

「本書帯より」スピードに象徴され、環境を破壊しつづける現代社会は、誰にとっても生きにくい。それとは異なるライフ・スタイルを求めて、さまざまな場所で模索し、考える人々の言葉に耳を澄ます。〈遅さ〉という大切なものを再発見するユニークな試み。

「スロー・イズ・ビューティフル」
著者・辻 信一
発行・平凡社
定価・1800 円＋税

Calendar

月と季節の暦
月と太陽の暦制作室

月暦（旧暦）カレンダー「観る読む暦」。月暦と新暦の日付、月齢、月の出入り・南中時刻、満潮・干潮時刻などのデータのほか、二十四節気、雑節、七十二候の解説を掲載。これからの「スローライフ」には欠かせないカレンダーである。

「月と季節の暦」
制作 発行・月と太陽の暦制作室
（TEL 03-5246-5588）
定価・2000 円＋税

CD

ナッシングス・イン・ヴェイン
ユッスー・ンドゥール

世界的に活動している西アフリカ・セネガルのミュージシャン、ユッスー・ンドゥールの新作アルバム。アルバムタイトルは「どんな苦労も無駄にはならない」という意味。ジャケットの写真はアフガニスタンのカブールで撮影された。世界各地で困難な状況にある難民たちや子どもたちへの想い、世界中の紛争地域の平和への願い、未来への希望が込められている。

ワーナーミュージック・ジャパン
（WPCR19066）
定価・2400 円＋税

Information

グランドゼロ

第 55 号

発行日　2003 年 2 月 26 日
発行人　鎌田實
発行所
日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字　貝原浩
イラスト　武内裕子
重岡朱
表紙デザイン　酒井隆志
スタッフ　神谷さだ子
布山みな子
重岡朱
高橋俊光
佐内裕之
協力　海老名英治

■編集後記

新年を迎えて、ＪＣＦの周辺ではおめでたが続く。ボランティアスタッフのＥ君、東京事務局のＡさんに赤ちゃん誕生、（微笑ましい親ばかメールに事務局が湧く）。理事さんが相次いで本を出版、（売れ行きも好調らしい）。そんなまわりのおめでたをいただいて、事務局もなんとか
「めでたさも　中くらいなり　おらが春」……。　（布山）

■事務局日誌■

＜11 月＞
2 日　第 64 次訪問団 1 班出発
4 日　第 64 次訪問団 2 班出発
アロマセラピー体験イベント
6 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
10 日　第 64 次訪問団 A 班帰着
11 日　第 65 次訪問団出発（健康診断チーム）
13 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
15 日　第 64 次訪問団 B 班帰着
グランドゼロ 54 号発行
17 日　第 65 次訪問団帰着
第 66 次訪問団出発（新生児チーム）
20 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
21 日　あおもり市民風車・三上さん来局
24 日　第 66 次訪問団帰着
28 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
＜12 月＞
4 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
6 日　NPO 学習会
8 日　「アレクセイと泉」佐久上映会準備会
11 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
16 日　アロマライフあずみのデモンストレーション
17 日　よろずや・JCF 忘年会
18 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
19 日　ME ミーティング
20 日　サミィズダット発行
21 日　女鳥羽中学生徒来局
25 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
27 日　事務局大掃除
＜1 月＞
9 日　佐久上映実行委員会
10 日　「アレクセイと泉」松本上映会実行委員会
15 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
22 日　ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）
23 日　あおもり市民風車・三上さん来局
JCF 講座企画会議
29 日　国際ボランティア貯金説明会（信越郵政局）
ゴメリ州立病院との定時衛星通信（信州大学）

ＪＣＦ／日本チェルノブイリ連帯基金

●本部　〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263- 46- 4218　FAX 0263- 46- 6229
E-mail　jcf@jca.apc.org
Website　http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京　〒 164-0003
東京都中野区東中野 4-4-1 ポレポレタイムス社気付
TEL03- 3227- 1405　FAX03- 3227-1406

●京都　〒 607-8405
京都府京都市山科区御陵田山町 13-3
TEL075- 591- 7772

アレクセイと泉 上映予定

上映日	上映場所	問合せ先・備考
・2/28（金）	熊本県　熊本市産業文化会館	096-372-8903（斉藤）　監督参加
・3/1（土）	広島県　広島市青少年センター	082-870-3844（松田）　監督参加
・3/8（土）	千葉県　君津市君津文化ホール	0439-55-6235（後藤）
・3/9（日）	京都府　京都府立総合社会福祉会館	075-212-9132（大庭）　監督参加
・3/15（土）	神奈川県　横浜市健康福祉総合センター	045-833-6038（牧野）　監督参加
・3/15（土）～ 21（金）	埼玉県　深谷シネマ	048-551-4592（竹石）
・3/21（金）	福井県　福井市フェニックスプラザ	0776-24-5985（高橋）　監督参加
・3/22（土）	千葉県　南総文化ホール	0470-46-4127（金子）
・3/22（土）	新潟県　県民会館小ホール	025-273-6223（石山）「ナージャの村」同時上映
・3/23（日）	長野県　富士見町コミュニティプラザ	0266-62-7900（雨宮）　監督参加、写真展
・3/30（日）	福岡県　福岡市立少年科学文化会館	093-203-5282（谷口）
・4/9（水）～ 14（月）	沖縄県　那覇市リュウボウホール	098-898-4038 4/9 池澤夏樹×本橋成一トークショウ
・4/19（土）～ 26（土）	東京都　下高井戸シネマ	03-3328-5441　4/18（前夜祭）監督参加
・4/20（日）	東京都　東本願寺真宗会館	03-5393-0810（藤島）　監督参加
・6/7（土）・8（日）	長野県　松本市Ｍウィング	0263-46-4218（ＪＣＦ）　6/7 監督参加
・6/8（日）	岩手県　岩手教育会館	019-622-1066（日野岳）　監督参加
・6/21（土）	長野県　佐久市勤労者福祉センター	0267-67-4774（朝日奈）　監督参加
・7/6（日）	東京都　多摩市立やまばとホール	042-375-9449（村松）　監督参加
・7/12（土）	埼玉県　所沢市民文化会館センター	042-922-0462（森田）　監督参加

※上映予定は変更になることがあります。
サスナフィルムにご確認下さい。

情報提供・サスナフィルム（03-3227-1870）

＜いずみ＞に集う

長い年月を経て、天地をめぐる静謐な水。こんこんと湧き出る泉の下に馬を連れたワシリーさん、バケツを持ったナースチャおばあちゃんがいる。

ブジシチェ村の『いずみ』にひかれて、集まる仲間達。全国各地からたくさんの声が聞こえてきます。

長野県松本市では、聴覚障害者用「ナージャの村」プリントフィルムを作った橋本和子さんを中心に「生きる」をテーマに連続学習会を開き、「ナージャの村」と「アレクセイと泉」の上映会を行います。**6 月 7 日・8 日**、自由でたくさんの声が上がる上映会を目指します。運営ボランティア、当日参加の方を募っています。

連絡はＪＣＦ事務局にお願い致します。